
Travel For You

灰色狼娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Travel For You

【ZPDF】

Z0314D

【作者名】

灰色狼娘

【あらすじ】

リンは普通の女子大生だった・・・動物園で変な狼に会うまでは、だが。異世界の国アルフィンで魔術師のサライに拾われ、リンの新しい人生が始まる。しかし、それはイケメンと陰謀い囮まれたかなり刺激的なものだった・・・逆ハーレムな異世界召還ファンタジーです。

1・1 「これは運命?」（前書き）

どうも、灰色狼娘です。

Travel For Youは初投稿作品です。

読んでくださった方がこんな世界に行ってこんなキャラと会ってみたい！と思える小説を目指して頑張りますので、よろしくお願いします。

文章力皆無の修行中の身です。

批評・応援などメッセージお待ちしております。

1・1 「これは運命？」

白馬の王子様なんて、信じてるわけじゃない。

でも、もし運命の人、私だけの王子様がいたら？

この出会いの意味は如何に。

第1章1話「これは運命？」

急ぎ足で駅へと急ぐ。

耳元で流れる曲調と足が刻むリズムが、自然と重なり口元がほころんでしまう。

3分後に出る電車を逃せば、完全に遅刻。

時間に厳しいキャプテンは2日連続の遅刻を認めるほど甘くないはずだ。

たかがサークル、されどサークルとでもいうか。

私は所属するフトサルサークルの練習へと向かっていた。

仕方がない。

奏でるリズムを搔き消して走り出す。

今日はお気に入りの黒いパンプス。

「ソソソソソソ」という小気味よい音を鳴らして速度をあげていく。

駅はもう目の前だ。

スイカを手元に出して、バンッと勢いよく叩きつける。

電車はあと30秒もすれば構内に入つてくる計算。

我ながら素晴らしい時間間隔！

・・・なーんて余裕で悦に入つていると、ピーツと耳障りな音がす

る。

「え？」

呆けた顔で改札機を見れば
「残額が足りません。」

「うそ…………？」

更に追い討ちをかけるように、小さな絶叫を搔き消すよつた駅のアナウンス。

どうやら電車が着いたらしい。

もう諦めてしまおつ。

・・・。

2日連続の遅刻、といつたが、詳細を話せば今月で6度目の遅刻。
嗚呼、無念。

今頃、仮病の欠席連絡なんとしてしてもこっちの状況はバレバレだろう。

しばらく音信不通になつて入院してたとでも言つてみるかな

しばし改札前で一人作戦会議。

名案も浮かばず小さく伸びをすると、駅の窓から青空が見えた。

「・・・動物園にでも行くかあ

晴れた日には動物園！

子どもが！－と言わればそこまでだけ
こんな気持ちよく晴れた日にすこすこ帰宅なんて、もつたないじ
ゃん？

気持ちも新たにスイカをチャージして、私は隣街の動物園へと向か
つた。

まあ、そこで何が待つてたかなんて
知るわけもなかつたんだよね

原田りん、19歳。

この後、彼女に起つる珍事は、他に例を見ないほどものだった。

平田の動物園はがらんとしていてけよつと寂しいくらいだった。
周りを見ればきっと同じく暇をもてます大学生であるうカップル
ばかり。

先月別れた彼のことを思い出して、私は小さくため息を吐いた。
別に未練なんてないんだけどね。

こう目の前でいちゃいちゃいちゃいちゃいちゃ……

されると、やっぱり心が痛む。

お前ら、お互にばっか見てないでもっと動物見なよー。
なーんて心の中で絶叫する。

そうやってカップルを避けるように道を進つていくと、いつの間に
か狼のエリアへと着いていた。

2メートルほどの堀をへだてたところに狼達がくつろいでいる。

「お前達、気楽そつでいいねえー」

目の前にいるひとり大きな黒い狼などは、だらりと肢体を投げ出し大あくびをしている。
ほんとに羨ましいわ。

人がいないと気が抜けてしまうものなのか?
思いがけず、狼相手にお喋りを始めてしまう。
今取つている講義がどうだとか、サークルでこんなことがあつただとか、本当にとりとめのない話を並べたてる。
例の黒い狼もまんざらじやない様子でこっちを見てくるので、どうも口が止まらない。

小さい頃もこいつやつて飼つていた犬相手に話してたなあなんて懐かしい思い出が頭をよぎつた。

「・・・ところで、お前、なんて名前なの?」

「・・・カムイ、だ。」

「・・・?」

え?

誰かに聞かれたと焦つて振り向くが、そこには誰もいない。
しばらくきょろきょろしてみるが、気配すらないのだ。

「何してる。こいつだ。」

低く太く、朗々としたテノール。

へえ。

最近の動物園つてこんな機能まで・・・

時代の移り変わつてす」のね

スピーカーはビリヒツコトのかなへなんできよひきよひしてこると

「お前は馬鹿か・・・

こつけだと言つてゐるだろ?」

声の方向に顔を向けると、先ほどの黒い狼が立ち上がり方も可笑しそうな顔をしている。

「ううでしょ――――――?」

最近、疲れてるひて自覚はあつたけど、幻聴まで聞こえるなんて・・・

・・・

そつ思つた瞬間、足元がふりついて視界が歪んだ

「おこひー・ビリヒツた?・!」

耳に優しいこの声が焦つたよひに響くのを聞いたのが、この世界での最後の記憶となつた。

第1章 2話「異世界で迷子」

目が覚めて最初に目に入ったものは白い天井。
白つていつも、無機質な真っ白とは違う。

温かみのある自然な白、クリーム色つていうのかな?

カーテンから漏れる陽の光と戸外から聞こえてくる鳥の声。
じくじく平凡でいてあまりない平和な朝のひと時を堪能する。
布団の中に潜り込み、思いっきり背伸びしてみる。

ああ! 幸せ!

・・・つて、レジドロ?

幸せ過ぎて、5分くらい気づかなかつたけどさ
ここ、うちじやないよね
こんな家に住んでる友達もいないはずだ

やつと半分くらい覚醒した頭をフル回転させる
が、何も思い出せない

動物園で変な狼が喋り出して、とそこまでの記憶しかない

あーでもないこーでもないうーんあーえー
パニックに陥りそうになりながら頭を抱え込んでいる

「目が覚めたようですね」

ドアが開く音と共に、穏やかな声が降ってきた

腰まで届きそうな銀髪に深く蒼い色を宿した双眸。

穏やかな声からの印象を裏切ることなく、彼の表情は優しげな笑みを絶やさない。

知らない人物を田の前にパ一ぐる私を宥めた彼は、なぜか楽しそうに言葉をつむぐ。

「とりあえず朝ご飯にしましょ。話はその時にゆっくりできますか？」

決して命令口調ではないのに、逆らえないにかを彼は持っていた。色々と聞きたいことはあつたが、とりあえず頷く。

その様子に満足したのか、にこりと笑んだ彼はこちうに手を伸ばす。

「 ああ。 」

なにもわからないまま、私は食卓へと招かれたのだった。

話をまとめてみるとこしよつ。

先ほどの彼は、自らをサライト名乗つた。

ここはアルフィン王国の北端、夕紅の森という場所らしい。彼はここで一人、魔術研究をしているんだと。

何が専門だとか聞きなれない単語で楽しげに語られたが、そこは割愛する。（「めんね、サラ。笑

私は彼の家から15分程の距離にあるシャン湖のほとりに倒れていた。

彼に助けられてから2日間の間、ぐつすりと眠つていたらしい。

魔物の多く棲むこの森で無傷だったことに、彼はいたく驚いていた。

自分でまとめておいてなんだけど・・・

自分で今状況をまだ信じることが出来ないのが現状

どうやら私は異世界とやらに来てしまったようなのです

サラにすると、異世界からの訪問者はこの世界では珍しくないんだとか。

召還された人、迷い込んだ人、自らやってくる人、などなど色々いるらしいけど。

私はどうやら迷い込んでしまったみたい。

ここに来る直前に、私がいたところの近くで誰かが異世界への扉を開いた

私はそれに巻き込まれてここに来てしまった

今のところわかるのは、それだけみたい。

魔術の世界ではそこそこ有名だというサラですら、特定の世界の特定の時間に扉を開くことはできないんだって

そういう能力は王族か特殊な部族にしか使えないらしい

つまり、帰れないこと

なんとなくわかつてたんだけどね

異世界召還モノっていうの？そういう小説って

帰れないってセオリーだもんねえ
ヒロインは帰る手段を探して奮闘！そのうちに愛が芽生える！みた
いな
でも実際こんな状況になるとそんなの不可能じゃん……って思つ
ちゃうよ

家族や友人と会えない、それはものすごく辛い
けど、テストや就活とかさ、わざわざしかつたものも無いんだよね、
こつち
適応力の高さだけは昔からピカイチだったわけだけど、この状況で
発揮されるとはね

まあそんなこんなで、サラリとの2時間にわたるながーい朝食を終
えた頃には
私はこの世界で生きていく決意ができていた

「ええ。まあ私はこれでも200歳くらいなので」

こちらの世界に来てちょうど一週間目。

相変わらず穏やかな笑みを浮かべて、彼はとんでもないことを言つ
た。

いや、とりあえず、年上だらうなあとは思つてたよ？
外見からして25歳くらいかなつて田星はつけてた
けど、あの～200歳つて・・・アナタ妖怪デスカ？

発端は、私が「この世界で生きてくよ」ってなんとも健気な発言を
したことだった。

そんな私にサライは、「じゃあリンを僕の養女にしよう」なんて嬉しそうに言った。

この世界にも戸籍といつものがあるらしい、職を得るのにもこの戸籍がないとどうにもならないらしい。

異世界から来た人間は基本的に政府の監視の下に置かれ、保護を受けられる反面、自由には生活できない。

最悪の場合、危険だと見なされれば監禁されてしまつららしい。だから、サライの養女として登録し、始めからここにいたという設定しようと彼は言つ。

ぽかーんとした表情の私に心配そうに声をかけてくるサライ。

「大丈夫ですってー」いつ見えても政府の方にツテはありますし、不自然などこのだつて誤魔化せますよ」

見当はずれなサライの言葉に思わずふきだす。

「いや。サライが200歳つてことに驚いたの！
私の世界じゃ100歳も生きたら長生きだし、おじいちゃんの姿なんだもん」

それを聞いてサライは得心したかのよつて、うんうんと頷く。

「こちらの世界では、人は皆、月の加護を受けていますからねえ
異世界から来た人もここでは等しく月に愛され、長寿を全うします
外見や能力は、その人が人生において一番美しく強い時期のもの
で固定されるんですよ

その代わり、生殖能力は低く、子を成すことは難しいのですが…

・

へえ。

いわゆる不老不死ってやつかあ。

なんだかすごい世界に来ちゃったなあと今更ながらに思つ。

科学よりも魔術が発達した世界。

銃器ではなく剣や「が支配する世界。

そう。ここは私のいた世界とはすべてが異なつてゐる。

相変わらず呆けた顔の私がよっぽどおかしかったのだろうか
サラ이는口元を手で隠しクツクツと笑つてゐる

「リンは本当に可愛いですね」

なつ？！

可愛いとこう単語に顔が赤くなつてしまつ
酸欠の魚さながら口をぱくぱく

そんな私を見たサラ이는体を折つて笑い出した
もうたまらないといった様子である

・・・なんかむかつく

必死に赤らむ顔を正して

「何がそんなにおかしいのー」と始めてみるものの

「そんなに可愛いと、養女ではなくお嫁さんとして登録したくなり

ますね・・・

「ダメ、ですか？」

なんてニヤニヤしてくる

「だあああああああああああ」

必死に直した顔もまたすっかり紅葉状態。

穏やかで真面目で優しくて・・・

そんなサラの印象に小さなヒビが入つていく
意外とこの男、プレイボーイなのか？！

200才を越えるという男に失礼な発言ではあるが・・・
気障なセリフなんて吐かない日本人男性に慣れ親しんできたリンには刺激が強すぎるというものだ

「まあ。お嫁さんの件は保留にしておいてあげましょ♪。」

いつの間にやら真顔に戻つたサラはこいつと笑う

「『』アルフインの民は20歳の誕生日から1年間、王宮で仕事をするという決まりがあるのです。

リンは今19歳と半年のことなので、今から半年後ですね。

大事な娘を奉公に出すのは心配ですが、これもこの世界で生きるためにには必須ですからね・・・

これから奉公までの間、魔術・剣術・歴史など、必要なことを教えます」

あはは・・・

まあやつぱりとは思つたけど、『』ちでも就活といつものはあるんだね

王宮仕えといつのは、いわゆる公務員のよつなものらしく、アルフ

インでは最も栄誉ある仕事なんだとか

1年間の宮仕えとは、その器がある人材を探すための試用期間のよ

うなものうし

「・・・富仕えで変な虫がつかないよう手を打たねば・・・。」

珍しく陰鬱な顔をしてサライがなにか呟く。

「ん? どうしたの?」

「いえいえ。独り言ですよ」

なにを呟いていたのかと尋ねた時には、いつもサライスマイルに戻っていた。

中をリンは知る由も無い・・・。

この二人、どうなることやら？

第1章 3話「予想外の展開」

カムイは猛烈に「イライラ」していた。

今が稽古だといふことも忘れ、斬りかかって来る部下を猛然と張り倒す。

「うがああつ！……！」

「なんでなんだつ！……！」

稽古場に響く雄叫び。

しかし部下達は皆地面に突つ伏し、それに答える者はいない。哀れ、典型的なハツ当たりといふやつである。

「……いい加減にしないか、カムイ？」

いかにも呆れた、といった口調で呟く声がひとつ。扉の方を振り向けば、金髪碧眼の美貌の男子が一名。

・・・と、後ろにはビクビクと震える少年が隠れるように立つている。

生き残った部下が彼に泣き付いたのだろうといふことは予想に難くない。

「クレイか。すまんな。」

素つ「氣無く返すものの、苛立ちを声から隠す」とはできない。

「まだあの子は見つかっていないみたいだなあ

鬼の第一騎士団長ともあらう奴が女一人で情けないことだ

そもそもおかしそー「うに言つクレイ」、カムイは眉をひそめる。

「仕方ねーだろ。

連れて来たつもりが、こっちに着いたらいねーし・・・
さすがの俺にも予想外の展開なんだ」

そう呟くカムイは、傍から見たら捨てられた子犬のように不安げな
顔だ。

「気配を感じるから、こっちの世界にいることは確実なんだけどな。
・
誰かの結界内にいるのか、それ以上、場所が特定できねえんだよ
変な奴にとつ捕まつてなけりやいいんだが・・・」

はうーっと彼らしくない弱気な声をあげてカムイは座り込む。
こんなカムイをクレイはいつもほつとけずにいる。

「一応、彼女を探すよう公布は出しているんだがな
名前もわからない」というと、なかなか難しいものだ
お前の言葉をもとに作った似顔絵も大して役に立たんしな

「この国では珍しい黒い瞳が唯一の手がかり、といつたところだらう
か。

身長は160センチくらいと小柄で華奢な体型。

アーモンド型の大きな猫目にそれを縁取る長い睫毛が印象的。
厚めの唇は紅を差さずとも赤く、白い肌に咲いた華のよう。
鼻は低めだが、それが整った顔を愛嬌のあるものにしている。
くるくると変わる表情はたまらなく魅力的。

カムイの話す彼女は、こんな感じだ。

しかし、惚れた男の言葉なんて信じるもんじゃない。

まあ実際はもつと平凡な娘なのだろうと、クレイは結論付けている。

しかし、興味が無いわけではない。

女遊び激しく、一人に執着したことのなかつた友人がここまで入れ込む女。

しかも一日惚れと来た。

こんな面白い話が他にあるだろ？

「まあそんなに焦るなよカムイ。

同じ世界にいるんだから、必ず巡り合つむ。」

にやりと意地悪そうな笑みを浮かべて、友人を励ます。

単純な友人は、ぱあっと顔を綻ばせ「そりだな！俺は頑張る！」なんて言つてゐる。

さあて、これからどんな面白い筋書きが待つてゐるのやら？

異世界の娘さんとやら。

俺を楽しませてくれよ？

1・4 「教師と生徒の複雑な事情」

第1章4話「教師と生徒の複雑な事情」

時がたつのは早いものだ。

リンがアルフィンに来てから、すでにふた月がたつていた。

「むー。 さらいせんせー。 きゅーけーはー？」

机に突つ伏したリンに、サラライはにこっと告げる。

「早く着替えて下さいね。 次は剣術の時間ですよ。
庭でお待ちしていますからね。」

日本の大学生って楽だつたんだなーと今更に思つ。
好きな時間に講義を組んで、出席がない講義には行かない。
もともと自由人なリンは、興味のある講義以外にはほとんど出席していなかつた。

それが今や、専属家庭教師付きの生活である。

しかも笑顔を絶やさないくせに、ものすゞーく厳しかつたりする。

そのおかげか、リンの魔術・剣術・その他教養はぐんと成長していく。

小さい頃に習つていた剣道、よく読んでいたファンタジー小説、そんなもの達がここにきて役に立つなんて因果なものである。
まあもともと暗記が苦手なリン。歴史や細々とした礼儀作法の授業などはいまだに進歩無し、なわけだが。

サラライの指導の下、リンは乾いた土壌のようこ、様々な技術・知識を吸収していく。

サライとしては複雑なところである。

教師としてはリンは最高の生徒だった。

興味のあることに対しても、彼女は貪欲ともいえるくらいに追及した。

1を教えて10を学ぶ生徒といったところか。

暗記が苦手であることと、焦って小さなミスを犯しがちなどはあつたが、それを引いても優秀といえる人材だった。

しかし、優秀な彼女のこと、富仕えに出したらそのまま帰つてこないのではないか?

そんな不安も頭をよぎる。

向上心のある彼女のことだ。

士官の仕事を辞退することは、せつと無いだろう。

それに女の士官となれば、数も少ない。

華に群がる蝶（いや、虫だな）のよう）、男達が寄つてくるだろう。やはり何か手を考えねば・・・

「サライ？準備できたよ」

庭で思案にふけっていたサライにリンが声をかける。

気づかぬうちに顔が固まっていたようだ。

眉間にしわを寄せ、口をへの字にしたリンが、にじりと笑う。

「Iーんな顔になつてたよ？」

ああ。なんでこの子はこんなにも私を温かい気持ちにさせるのだろうか。

リンといふと不思議なくらいに、心が穏やかで暖かなものになる。同時に、誰にも渡したくない、と自分らしからぬ熱い感情も湧き

起こしてしまつ。

「さて、剣術の稽古と参りましようか」

さつきの顔についてはノーローメント?...と騒ぐリンをわざと無視して笑う。

やはり自分はこの子をまだ手放せないな、と心で苦笑した。

稽古と講義に明け暮れる一人の毎日だったが、夜のお茶会だけは日々の恒例行事となっていた。

お茶会、というよりピクニックとでも言つべきか?

リンが倒れていたシャン湖のほとりで月を見ながらお茶を飲む。アルフインの人にとって、月光に当たることは、月の加護を受けるという意味でも大事なものである。

サラトイがリンを見つけたのも、日課の月光浴の途中だったのだそうだ。

リンが来てから、夜の月光浴はお茶会へと姿を変え、一人の会話の場となつた。

富仕えに向けて組まれた過密スケジュールをこなしていると、感じる暇さえない郷愁。

元の世界と変わらずに輝く月を見ていると、封印したはずの感情たちが溢れ出でくる。

そもそも大学の友達はテスト勉強かな?とか

お父さん、またゴルフでムリしてぎっくり腰になつてたりしないかな?とか

温かいカップを両手で包み小さく呑みリンをサラリは穏やかに見守る。

慰めるわけでも頑張れと鼓舞するわけでもないサラリにリンは救われていた。

ただただその深く蒼い双眸で見つめられないと、大丈夫だよと言われているような気がした。

サライは夜の海のようだ、とリンは思つ。

去年、サークルの夏合宿で行つた千葉。

夜の海に行つて、黒い波を眺めていたことを思い出す。

生き物のようにじごめく漆黒の水面。

人のいない海岸では、自分の吐息と波音以外に音は存在しない。ぽつんと砂浜に座り込めば、だんだんと海に自分自身が融けていくかのようだつた。

この黒く広大な海ならば、全てを、ちっぽけで卑しい自分すらも受け止めてくれる、そんな気がしたつ。

この世界に来て、初めて会つた人がサラリではなかつたら?

そう考えると、いつも寒気が走る。

もともと適応力が高いとはいえ、リンは家を失い、家族や友人を失つたのだ。

一時的なものではなく、永遠に。

今までの人生を一瞬で白紙にしたようなこの不可抗力な旅はまだ始まつたばかりなのである。

どうして私だつたの?

なんのために連れて來たの?

旅立つ直前に出会つた黒い狼。

リンをここに連れて来たのは彼だと、リンもサライも考えていた。
彼に会つたら聞きたいことばかりだ。そして、ちよつぴりの恨み言
も。

なにはともあれ。

リンは生きている。

今までにないほどに、生の実感に溢れ、今といつ時を謳歌している。
まあ、恨み言ついでにお礼も言つてあげようかな。
なんて月を見ながら、リンは微笑む。
だから、早く私を見つけてね？
黒い狼さん。

1・5 「準備万端？！」

月は万物を慈しみ大いなる愛情を注ぐ。

しかし、自分にとつてこの愛情こそ、忌むべきものだつた。

世界を呪い、自分自身を呪い、月を呪つた。

そう、彼女に会つまでは。

人に言わせれば、それは一瞬の逢瀬。泡沫の夢。

自分にとつては、それは世界の全てを変えた永久の記憶。

お願ひだから。

愛しい君よ、早くこの腕の中へ。

第1章5話～準備万端？～

剣術、魔法、史学、教養、文字、馬術・・・

日々の目も眩みそうな怒涛の講義も最終段階を迎えていた。

自分の研究なんてどこ吹く風といわんばかりに手取り足とりで教えてくれるサラ一大先生。

「自分の研究は大丈夫なのー？」

と、心配半分・講義減への期待半分で聞くリンに大先生はさらつと微笑む。

「私は仕事より家庭を優先する男ですよ」

リンちゃんつたら赤面。

「う、うん。だって私、サライの養女、だもんね」

あははと乾いた笑いをおまけにつけとく。

サライはといふと、やはり楽しそうに笑つている。

リンが来てからといつもの、サラの笑いはバリエーションが大幅に増えた。

サラスマイル改とでもいったところか？

穏やかな笑みがもともと好評だったサラだが、彼の様々な種類の笑みを網羅しているのはリンだけであろう。

しかし、そんな二人の日常もあと一週間で、一端の区切りを迎えることになる。

富士え、もうそんな時期になってしまったのだ。

講義の総まとめに加え、荷造りの準備や書類の申請が慌しく行われた。

そういえば、今日は新しい衣装が届くんだつけ？

元の世界とは全然違うメールヘンチックな衣装達が我が家に届くわけだ。

選びたい！と言った時には、サラがもう注文し終えた後だったので、ちょっと残念だつたわけだけど・・・。

まあこうやってプレゼントを待つ子どものよつこじキドキするのも悪くないかなって思つ。

「さあ。お待ちかねの荷物が届きましたよ」

わお！

どんびしゃのタイミング！

衣装缶」と頼んだのだろうか。

精巧な彫刻が施された美しい木箱が目の前に置かれる。

開けていい？！とはやる気持ちを抑え、サラに問いかける。

子どもを慈しむかのよつた田でリンを見ていたサライは促すよつて頷く。

やつぱ、ドレスみたいな入ってるのかなあ？
いやいや、富仕えつてお仕事だしメイドっぽいのとか？
フリルとかレースとかいつぱいついてるのかな？

わくわく・・・

ん？

いちまい、にまーい、さんまい、といつた具合で引っ張り出していく。

が、想像していたものとはかけ離れたものばかりが出てくる。
そう大きくなない衣装缶にこれでもかという程入っている衣類だが、
お皿並てのものは最後まで出てこなかつた。

「・・・サ、サライ？」

「ふふ・・・お気に召しましたか？」

えーっと。

教養のお勉強で習つたマナーとかでは、ドレスを想定したものもあつた、よね？

んでもつて、教科書の人たちは、みんなメルヘーンなドレスを着ていた、よね？

サライ君？

強烈な視線攻撃で答えを促す。

「実は・・・リンのことは養女ではなく養子つてことにしてやつて

ました」

テヘツ といつ効果音さえついてもそつたサライの表情。

森から鳥がはば立つ音が聞こえてきそうだ。

んーと。頭を整理してみよう。

んで今度は、性別詐称？

どんだけですか？（汗）

ほかーんと口を開けたままのリンにサトイは意氣揚々と説明する。

「大丈夫です！」

私の魔法で体の作りは一時的に変えられますし、ほれる」とほめずないです

アルブインの都も最近は治安が悪いですしねえ・・・男の方が富仕えに出しても安全かと思い、独断と偏見により、息

ダメ、でしたか？」

最後の一言のみ、ちょっと悲しげな顔を作つてみたり。

を隠す方が効率的と判断したまでの」とある。

だが、じじいは心配顔をしてリンの同意を得ねば……！

そんなサライの心中も知らず、まんまと心配顔にひつかかるリン。

ああ！ 哀れ！

「あつ・・・

そんな心配してくれてたのに、『めんねつ』

サライの優しい配慮を踏みにじつてしまつた・・・
そんな反省でいつぱいのリン。

「これつ着たらけつゝ可愛いかも！
ちよつと試着してくるねー！」

健氣だ・・・健氣過ぎる。

騙して』めんね、と心の中で謝りつつも悪氣無し反省する『無無しの
サライを置いて、リンはどたばたと浴室に戻る。

数分後

（可愛いツ可愛すぎるツ）

男装の麗人といつよりは、女顔の美少年・・・

男物の服に袖を通し、帽子に髪を入れ込んだリンは、正直、めちゃ
くちゃ可愛かった。

（ああ・・・ここにリンの『ツシャツ』とやらがあれば、どんなに
いいことかー）

男装がちよつと恥ずかしいのか、もじもじ『氣味』のリンの様子が可愛
さに拍車をかけていく。

この場で襲つてしまいたい！なんて、不埒な誘惑を懸命に抑え、「
似合つてますよ」と微笑む。

「あ、ありがと」と照れたりされると、余計、ちよつとは辛いのだが。

これはまづこと「んー。顔とかもちよつと魔法でいじりますか？」

と悶つサライを必死に LNG が止め、なんとかお披露目会は終わった。

2・1 「いわ都くー」（前書き）

早くもサラライから巣立ちです。

テンポのいい文章をを目指していたのですが、逆に味気なくなつてそうで怖いですね（ 、 、 ）

これから登場人物もどんどん増えていきますので、彼らの「こと」、よろしくお願いします。笑

2・1 「いざ都へ！」

第2章1話「いざ都へ！」

サライからも、うんうんと四次元ボケットならぬ四次元バッグを片手に、もう1時間はゆうにリンは立っていた。

「1) 飯は3食ちゃんと食べて下さいね？」

「E還状と地図、ちゃんと持つてますか？」

「手紙を書いたら、このバッグに入れてくださいね？」

・・・以下略。

上京した時の親のことを、思い出す。

そんなのわかつてゐよーと、言いたくなる」とばかり言つのだ。
しかし、うんざつとこうより、可愛いなと思つてしまつ。

こんな時の魔法の言葉。

「大丈夫だよ、サライ。困つたり何かあつたりしたら、すぐサライに連絡するから。」

とびきりのスマイルをつけて、そう囁く。
泣き出しそうなサライは、はつとした顔になり、すぐに苦笑を浮かべた。

「これじゃあ本当の親みたいですねえ
リン、頑張つてくるんですよ」

「これまた上京した時と同様、サライはリンを優しく抱擁した。

暖かな腕に包まれ思い切り息を吸い込む。

嗅ぎなれた大好きな芳香
サライの優しい匂い。

この安心感をイメージさせるひとつとも、一年間お別れか、としんみ
り思つ。

「一年間なんてすぐだよ。

だから、待つてね、お父さん？」

悪戯めいた笑みを浮かべ、そつと腕から離れる。

卷之二

ありがとうございます、今日は言わない。

卷之三

その代わりに

「じゃあ、いつでも来ます！」

そう元気に告げて、リンは都行きの馬車へと乗り込んだのだった。

いつてらつしゃー、と寂しげでいてどこか誇らしげな笑みを添えた
サライの眩きはきつとリンに届いただろづ。

!

リン・・・いやいやリンクは都についていなや最速で迷子になつた。そう。この町のど真ん中で雄たけびをあげている少年はリンクと名づけられたリンクであつた。

地図は確かにもらつていて手に握り締められているのだが。
まず、この地図！アバウトすぎ！

そして、町！店と小路多すぎ！

アホかー！と、地図を地面に叩きつけるものの、すぐに反省して、くしゃくしゃの地図を取り上げる。

もひ、町に入つて2時間だが、城とおぼしき聳え立つ塔の連なりにはいつこづに近づけない。

真ん中に見えるんだから楽勝！と思つたのが、運の悪さだったようだ。

今では地図のどの辺に自分がいるのかすらわからない。

時間に余裕を持つては来たが、このままでは時間に遅れてしまつ。ショットばから遅刻なんて、元の世界よりひどい……。

わざわざまでの勢いはどこへやら。しょんぼりと道端に座り込んでしまつ。

20才の誕生日にして、迷子。
その事実だけでも泣けてきた。

「君、気分でも悪いの？」

正直、天の声かと思つた。

春の木漏れ日のような優しげで上品な声。

この際、悪魔の囁きだらうとなんだらうと構わなかつたが。

「迷子なんですか。」

思いつきましたが立ち上がる。

声の主は、これまたサラリぱりのイケメンだった。

金髪碧眼つてやつ？

ああ。なんてこの世界はイケメンパラダイスなんだろう。

「ふーん。

女かと思つたら、男かよ。めんべくせえ

豹変、とこう単語はあつといつこいつ時に使つただろうな、と。

真っ白になりかける頭の中でぼんやりと考えた。

めんべくせえめんべくせえ・・・・頭の中でHゴーす。

「せひ。じこまで行きたいのかはつきりしやがれ。

俺は城に戻るといだから、途中までなら連れてつてやる

はつとその顔を見ると、そこあつたのは意外と優しげな笑みだった。

「だりい」とでかでかと貼り付けたかのような表情は健在だったが。きょとんとしてると、なぜか後頭部をはたかれる。

「ぼーっとしてんじやねえよ。」

お前みたいな女か男かわからぬーような奴がつぶつこいつるどなにかとトラブるからな

「ほり、行へぞ、せんちへりんが

照れ隠し、なのだりうか？

まるで言い訳のようだ、早口でまくし立てる彼はなんとも可憐りじ

くコンクの田に映つた。

「あらがとう」ゼコム
にやにやしながらついていくと「笑ってんじゃねえ気持ち悪い」と
予想通りの罵声が飛んだのであった。

「やうこひ」とは先に言え、すつとじひこ

呆れ顔で、クレイと名乗った金髪碧眼男が悪態を衝く。

場所は王城正門前。

どうして王城なんかに用があるんだ?と聞いてきたクレイに富仕え
なんですかとのほほん答えたリンク。

何が気に食わなかつたのだろうか、「つたく、わかつてりや……」
「くそつ」とぼそぼそ呟くクレイを見つめる。

彼のおかげで時間には間に合いそうだが、ちょっとめんどくさいの
も正直なところだった。

ありがとうと言つてここで別れるはずだったのに。
遅刻、変な人との遭遇、もう富仕え初日にして最悪過ぎる出だしで
ある。

サブいぼが立つた。

「リンク=フエロン=リアータ。

おま・・・いや、君にお願いがあるのだが。」

聞きなれない新しい自分のフルネームに、打つて変つて慇懃無礼か

つ優しげな口調に変わったクレイ。

顔はといつと、笑顔かつ脅しといつたかたゞい表情である。

「はっ、はい。なんでしょうか」

恐々といった感じで尋ねると、クレイが耳元に口を近づけた。

「てめえ、今日の俺との会話、誰にも言つんじゃないぞ
俺は王城において、麗しのクレイ様と呼ばれる貴公子なんだ
それに傷つけやがつたら・・・どうなるかわかつてんな?」

ヤクザも真っ青というべきか。

ただただ何度も頷くしかできないリンクの様子にクレイは満足気だ。

「ちなみに私僕は貴方の直属ではないものの上司にあたりますので
今後ともよろしくね、リンク君?」

うふふと花でも背負つてそなクレイに連行されて、リンクの宮仕
えは幕を開けた。

クレイに連れてこられたのは、集合場所に指定されていた王城の一
室だった。

奴はといえば、リンクを椅子に座らせるとさつさとどこかへ消えた。
もう一度念押しすることは忘れなかつたわけだが。

(・・・クレイに会つて、やつぱりよかつたわあ)

変な奴と関わつてしまつたことを心から悔いていたリンクだが、部
屋に通され安堵すると同時に考えを改めた。

王城の内部は都以上に入り組み、たとえ王城まで着いたとしても中

に入つて迷つていただろつ。

大学入学当時、広すぎるキャンパスで何度も迷子になつていてしたこと
を思い出すと、これからの方仕えが憂鬱でならなかつた。

「おお。やつと来たか」

えらく明るい声が背後からかかる。

しかし、返事をしようど、振り向いたの瞬間だつた。
声の主を確かめる間もなく、世界がゆがんだ。

それは極彩色の世界。

視界は回転し、様々な色達が鮮やかに舞つた。
万華鏡みたい。

そう思つたのを最後に、世界は暗転。

リンクは意識を手放した。

2・2 「イケメンは変態?」

第一章第一話「イケメンは変態?」

頬に冷たい感触が気持ちいい。

小さい頃は風邪を引くと、お母さんが冷やしたタオルで触ってくれて・・・

ちょづびにこんな感じだつたなあ。

仕事で忙しい母親を拘束してしまひしと、申し訳ないと同時になんだか嬉しかったつけ。

そんなことをぼんやりと考えながら、重い瞼を持ち上げる。目を開けると、そこには見慣れないイケメンが一人。

キラキラの金髪にサラサラの黒髪。

並んだ二つの顔は、揃って心配顔。

非日常的でおかしな光景に思わずふつと笑ってしまう。

「おーー笑う元氣があるんなら起きるーー」

お。金髪の方が喋った。

なんかこのツンケンした口調、聞き覚えがある。

だけど、そんなこと知っちゃうつたない。

私は寝起きがよろしくないのだ。

うつさいなーと呟いて再び布団に潜り込む。

すると、「だーーなんだこの生意氣坊主ーー」とこの金髪の声が再び。

どうやらこのまま寝かしておいてはもうえないよつである。意を決し、勢いをつけて上半身を起こす。

半覚醒のまま安眠妨害者達を見渡すと、なかなか面白うことになつてゐる。

真つ赤になつて怒つている金髪に体を一つ折りにしてお腹を抱えて笑う黒髪。

なんだこれ？

「ほんとにすいませんでしたツ」

寝起きとはいえ・・・ショッパながらやつてしまつた。

ぼんやりしていて気づかなかつたが、怒つていた金髪はクレイだつた。

そして、リンク起床後もしばらく爆笑していた黒髪は、リンクの直属の上司にあたる人物だつたのだ。

突然倒れたりん크をここまで運び、介抱してくれていたのも彼だつたようだ。

あのタオルの感触、気持ちよかつたなあと頭の片隅で思つ。二重人格イケメンのクレイと違つて、なんだかいい人っぽいしなにはともあれ、一安心である。

ようやく笑いの波が去つたのか、謝り続けるリンクに黒髪が話しかける。

「えつと。リンク＝フロン＝リアータだな？」

さつきクレイが言つたとおり、俺は君の直属の上司つてやつだ。カムイつて呼んでくれ。第一騎士団へよつこな。」

人懐っこそうな笑顔。

生来の顔はかなり鋭いもので、無表情なさきつとかなりの強面だろう。

戦いの最中のものだろうか、眉の辺りに一本、消えない刀傷まである。

それなのに、へらへらしているとも取られかねない彼の様子。

リンクは訝しい気持ちでいっぱいだ。

加えて、灰色の瞳は澄んでいて美しいが、時として寂しげな色を灯しているように見えた。

この人は、なにか踏み込んではならないなにかを、ぽつかりと空いた穴のようなもの抱え込んでいる。

警告にも似た心の中の違和感。

しかしそれは同時に、どうしようもなく彼に魅かれてしまった甘美な誘惑でもあった。

なぜだろう。

彼は人間なのに、じことなくあの黒い狼に似ている。

名前のせいだろうか？

カムイと名乗った黒い狼と同じ名を持つ黒髪の青年。

頬に突然触れた感触にはつとする。

「おーい。人の顔見て考え」とかー？」

カムイの顔を見ながら、考え込んでしまっていたようだ。

確かに自分が悪い。だが、この男、いつまでふにふにし続けるつもりだろうか？

いつの間にやらリンクの目の前まで来たカムイは、両手でリンクの頬をふにふにしている。

「あ、あのぉ・・・ふにふにするの止めてくれませんか？」

不覚にもどきおぼれてしまつ心臓を心中で叱咤しつゝ、おどおどと止めに入る。

「かあいーなあーお前。ほっぺたふにふにのふにふにだーーーっ
突然の絶叫に動けずにいるリンクをがばつと抱きしめるカムイ。
「相変わらずの可愛いもの好きの変態め。ぬいぐるみフリークがッ。
・・」

クレイが窓際でぼそつと呟く。

・・・・。

前言撤回。いい人だけどなんか変。

ああ。神様。この世界のイケメンは、頭のねじの様子がおかしいみたいですね。

2・3 「新しい仲間達」

第一章第三話「新しい仲間達」

朝五時に起床し、朝稽古をこなして、朝礼に出席
朝・昼・夜と5人編成のチームごとに割り振られたシフトに従い、
それぞれ見回りへ

空き時間は稽古なり飲むなり暴れるなり、自由

第一騎士団の生活は、まあこんなもんである。

騎士団とは名ばかりのもので、戦時以外は町のお巡りさんのようなもの。

空気はかなり自由で、集まつた人員もかなり仲がいい。

これは団長の人柄が強いようで、第10騎士団までそれぞれ空気には差があるようだった。

「はーあ。けつこう暇だね。」

宮仕えに備えて散々鍛えられたリンクの感想はかなり間の抜けたものだった。

今も見回りの途中で、同じチームの仲間と酒場でたむりしているところだ。

「まあそんなこと言うもんじゃねえって。

騎士団が暇なのは、平和な証拠だぜ？」

にししと笑つてまた大ジョッキを空けたのは、ゼクス。

鮮やかな赤髪が目を引くタレ目のイケメンだ。

酒好き・女好き・博打好きの三拍子を揃えた天晴れな男だが、実力

は相当のものらしい。

富仕えを経て第一騎士団にそのまま就職した切れ者だつたりする。

「とりあえずゼクスさんは飲みすぎです！」

「・・・間違いない。」

そんな抗議の声をあげるのは、シユラフとカイ。

シユラフはどこぞの貴族のおぼっちゃま。

金髪に童顔の可愛らしい容姿は第一騎士団の天使とまで言われるほどだ。

が実は、中身は相当タフガイ・・・いや小悪魔かつ破壊魔だつたり・・・。

彼を怒らせると一師団が吹つ飛ぶというのは、第一騎士団内のみで囁かれる伝説である。

その横に常時寄り添うよつているのがカイ。

えらくガタイのいい傭兵のような佇まいをしている彼は、その無口さゆえか、かなりの誤解を受けている。

本当は料理が趣味という可愛い男なのだが、彼と歩くと道が開くか絡まるか、そんな展開ばかり。

「いいじゃねえか。

俺は飲める相手が久々に見つかって最高に嬉しいんだ。水差すなつて」

ぽんぽんと肩を叩いてくるゼクスにため息をこぼすリンク。

そもそも自分はもともとのチーム配属ではなかつたのだ。

* * * * *

思い返せば富仕え初日。田を覚ましたリンクは第一騎士団の本部へと連れて行かれた。

新人さんが来るらしいということで、既に本部には団員達が待ち構えており、けつこうな歓迎ぶりであった。

その中でリンクが軽い自己紹介を終えると、誰やらが「飲むぞー」「歓迎会だー」と叫び出し・・・

結局、本部内での大酒宴と雪崩れ込んだ。

原料は違えども、ビール・ウイスキー・スピリタス・ワイン・・・拳句には泡盛や日本酒のようなものまで

出てくるわ、出てくるわ

女の子のような姿をしているリンクに、団員達は甘めかつ弱めのカクテルめいたものを差し出してくる。

が、残念ながら、リンクはそんなもんではなかつた。
所属していたフットサルサークルでは「漬し屋」と恐れられ、飲めばテンションガチ上がりの酒豪・・・
そんなリンクがカクテルもどきなんぞで酔うわけがない。

アルコールも微量ながら摂取し、テンションにもエンジンがかかつてきたところで

「リンク、いっさまーーーーーす 」

と、近くにあつたビールもどきの樽を抱えてイッキ。
現代風に言えば、ピッチャーのようなものか？

アルコールが喉を駆けぬけていく一氣特有の感覚を味わい、樽を床に置いて顔を上げると・・・

そこにはあつたのは睡然・呆然・尊敬・・・・・様々な表情の男達と沈黙だった。

「お前、さい」――――

若干、しーんとなつてしまつた場を変えたのはゼクスの一聲。

「ゼクス様、いつきま――――す」

と、リンクの時とセリフは同じものだが野太い声をあげて、先ほど
のものより大きな樽を抱える。

ゼクスの無茶飲みは毎度のことなのか、周りは特に不安げな様子も
見せず、また盛り上がり始める。

一氣飲みを終えたゼクスと拍手喝采の男達を尻目に、リンクは自分で酒を作り出していた。

（これはテキーラっぽい匂いだなあ）

（ウイスキーの等級がわかんないから、とりあえず全部飲むかな）

そんなことを考えつつ、飲み飲み飲み・・・

新しい世界の酒をほとんど飲み試した頃に辺りを見渡すと、まさに死屍累々といった感じ。

あちゃーっと苦笑いをし、とりあえず苦しそうな人の介抱にあたる。大学の飲み会を思い出しながら、背中をさすつていると後ろから声がかかつた。

「お前、可愛い顔のぼっちゃんかと思つたら、すげーんだな！
見直したぜ！」

と、先ほどの赤髪青年ゼクスが立っていた。

「まあ、クレイから見た目に騙されるなとは言われてたが。

「いやまあ面白いお転婆だとはな」

言葉を引き継いだのは、カムイ。

よくよく見れば、生き残っているのは、この一人と奥に座っている金髪の可愛い少年とガラの悪そつなお兄さんだけのようだ。

「お酒好きってだけじゃないですかあ」

てへへと誤魔化し笑いをして、テキーラもどきをカツと煽る。ゼクスやカムイのような酒豪は大歓迎である。

「ま、とりあえず飲み直そうぜ兄弟!」

と、まだまだ元気そうなゼクス。

「おーおー。うちの酒倉庫を飲みつくすんじゃねえぞ?」

言葉とは裏腹にカムイもやる気満々のようだ。

「お酒はダメなんですが……一緒にお話しに入れてもいいですか?」

酒豪二人がショットグラスを持ち寄つて輪を作つていると、鈴のような可愛らしい声がかかる。

振り向けば奥にいた金髪の少年がにこやかに立つている。

「お。天使の皮を被つた悪魔め。

お前の自称オレンジジースがスカイランだつてことくらいお見通しだぞ?」

ニヤニヤと返したのはゼクス。

スカイランとはオレンジリキューをベースにしたかなり強いカクテルのやうなものだ。

普通は小さなコップで飲むものだが、どう見ても少年の手にある杯はそんなレベルじゃない。

少年はくすりと余裕の笑みでもつて答える。

「あんたは黙つてなよ、ゼクス。

僕はあんたじやなくつて、このリンク君と話したくて来たんだ。
ねえ？はじめましてリンク君。僕はシュラフつていうんだ。」

突然に話を振られ、思わずキョドつてしまつ。

「あ。はじめまして！よろしくね、シュラフ君？」

クレイ並みの豹変ぶりにどぎまぎしつつ答えれば、返つてきたのは
満開の笑顔。

「思つた通り／＼！仲良くしてねえ！」

可愛らしく両手を胸の前で組んできやびきやびと喜ぶシュラフ。
その横からぬうつと手を差し出してきたのは、ガタイのいいお兄さ
ん。

「・・・カイ、だ。よろしく。」

言葉少なだが、うつすら浮かべた笑顔は、彼の人柄を表すような温
かいもので、好感を覚えた。

「こちらこそ。僕はリンク。」

と、手を握り返すと、なぜだか他の生き残り達も寄つてきた。

「カイつたらするいぞ。僕も握手握手！」

「俺とだつて握手しろよな！」

「団長の俺を置いてそりやないだろ～」

なぜか5人で握手。

変な状況だけど、なんでかな？
めちゃくちゃ嬉しい。

知らない世界に放り出されて、初めてできた「友達」。
サラリのような保護者とはなにか違う、新しい関係。
そう思つと涙が出てきた。

突然泣き出してしまつたリンクに4人は大慌て。

どうしたんだ？！とか大丈夫？！と口々に言う4人に、リンクは泣

きながら笑つてしまつた。

「・・・ありがと」

泣いたり笑つたり忙しい体を必死に制御して、それだけ呴く。
そんなリンクをカムイがそつと立たせてドアへと導く。

「明日に備えて今日は寝るべ」

そう3人に言い残してドアを閉めるカムイ。

涙が止まらないリンクをゆつくりとした歩調で団員の寮へと連れて
行く。

肩に置かれた手が暖かくて、余計に涙が止まらない。

ふつとカムイが止まつたところで顔をあげると、昼間に荷物を置いた部屋の前だつた。

「・・・あのつ」

カムイは、謝ろうとしたリンクをそつと抱き寄せて制止する。

自分の腕のなかにすっぽり入つてしまつ少年。

今日会つたばかりのただの部下、しかも男に、自分はいつたい何をしていいのだろう?

「何も言わなくていい。

今日はゆつくり休め。」

そつ声をかけると、ますます俯いてしまつ腕の中の少年に、カムイは語りかける。

「泣くのは悪いことじゃないぞ。

特に、嬉しい時は、な?

素直に感情を表せるのは、お前のいいところだ。大事にします。」

壊れ物のように頭をそっと撫でてやると、やつと少年は顔を上げた。涙の跡が月明かりに反射して美しかった。

「ありがとうございます。」

「こいつと笑う少年。

やはりこの子には笑顔が似合つ。

「ああ。部屋に入つたらさつと着替えて寝ろよ。」

「明日は早いんだ」

このまま抱きしめていたら、そのまま離したくなくなりそうだ。そんな自分の奇怪な感情に苦笑しながら、彼を部屋へと促す。

「おやすみなさい」

それだけ呴いてリンクが部屋に入るのを見送った。

ドアが閉まるのを確認し「お前に月の加護があらんことを」と呴く。可愛い顔の男の部下つても問題だなど白痴の笑みを浮かべながら、本部へと戻った。

その次の日。

「リンクはゼクスのチームに入つてもうおつと黙つ。」

団長からの突然のお達し。

昨日の時点では、ライスという穢やかそうな青年のチーム配属だったはずだが？

「ゼクスのチームはもともと4人な上に、そのうちの1人がほとんど顔を見せないんだ。

ゼクスのほかは昨日残っていたシュラフとカイだから、馴染みやすいだろう？」

突然の配置換えに驚いたものの、初めての友達がチームメイトになるのは嬉しいことだ。

リンクは配置換えに同意し、新しいチームメイトの元へと向かった。

そして今・・・

昼の見回りから酒を飲んでいるリーダー、ゼクス。
外ではいつだって礼儀正しく可愛らしい天使、シュラフ。
無口で強面だが心優しい力持ち、カイ。

第一騎士団に来て一週間目のこの日、酒場で。
リンクは新しい仲間を改めて見渡し、温かい気持ちになつたのだった。

2・4 「それぞれの想い」

第一章第三話「それぞれの想い」

リンクが第一騎士団に来て一週間目、か。
仕事を終えて、自室には戻らずに行き付けの酒場へと今日は来ている。

「遅くなつてすまん。」

声の主はわかつてゐる。クレイだ。
カムイがこの酒場で会つるのは彼だけ。
当のクレイはこじやれたバーが好きらしく、場末の居酒屋といった
感じのこの店を嫌つてゐるようだが。
カムイ本人はこの飾らない感じが落ち着いて、いつの間にやら常連
客となつていた。

「んで、例の女はまだ見つからぬわけ?」

单刀直入な奴である。
答えをわかつてゐるくせに、あえて言わせて落ち込ませないで欲し
いものだ。

「・・・残念ながらな」

「そのわりにあんま悲しそうじゃないんだな?」

さすがは幼馴染の親友といったところか。
職場も違つてしまふ見つけるもんだ、と思つ。

「あのリンクつて餓鬼のせいか？」

ニヤニヤ顔で図星を突かれると、ため息しか出ない。

「初めてリンクに会つた時、彼女が見つかつたつて思つたんだけどなあ」

そしたら突然、倒れた。

彼女との初対面と一緒にだつた。

長い長い一生から言えば、まさに一瞬の逢瀬が頭に蘇る。段々と薄れていく記憶の中のおぼろげな彼女の顔と田の前の少年の顔はそつくりだつた。

「ま。でもリンクは正真正銘の男だしなあ。残念テシタ。」

クレイは意地悪そうな笑みを浮かべているが、田は本当に心配そうである。

「俺もリンクを拾つたと時は、例の彼女かつて思つたんだぜ？
でもなあ、色々と調べてみたんだが、あいつの身元は確かなんだよな。

「養子つてところは気になるが、魔術一族の最高階級フェロンの名を冠する上に、あのサライトまわの養子ときた。」

そつ、カムイだつて色々調べてはみたのだ。

フェロンというのはアルフィン国において、魔術分野を司る一族にとつて最高の栄誉といわれる冠名。

カムイが持つリオリスターというのは剣術分野におけるフェロン階級、クレイもリオリスターに次ぐリオルンという冠名を持つ。

更に言えば、リンクの養父サライト＝フェロン＝リアータは、魔術界

の権威と呼ばれる男である。

先代の王時代に起こった大戦を機に隠居し今は研究生活と聞いているが、その名が持つ力はいまだ絶大なものである。

「リンクが彼女なのかはまだわからん。

でも、彼自身になにか惹かれてしまつのも事実なんだ。」

「・・・おい。お前、そんな趣味あつたつけ？」

正直な気持ちを吐露すれば、予想通りの反応。

これまた今日何度もため息。

自分でもよくわからなかつた。

しかし、あの少年になぜか惹かれてしまつ。

ここ一週間、自分には男を愛する趣味なんぞないと自分に言い聞かせ、わざとリンクを避けた。
だが結果はどうだう?

いつの間にやら彼を探している自分がいた。

「アルフィンーの色男の座を奪い合つた相手がお前だなんて信じたくないくらいの様子だぞ
かなり重症だな」

呆れたか? そうかそうか。

自分でもわかつてゐる。確かに重症だ。

リンクが倒れて寝てゐる時、もつとを覚まさないんじやないかと気が気じやなかつた。

リンクが泣いている時、腕の中に閉じ込めてしまつたくて仕方が無かつた。

そして今、「彼女」とリンクを重ねてゐるのか、リンク自身に惹か

れでいるのかわからず、気が狂いそうだ。

大好きな酒もなかなか進まない。

どうしちまつたんだよ、俺。

探し出して愛すべきは「彼女」であつて、リンクじゃないつてのにな。

カムイの自嘲的な笑みを、クレイの心配を隠すような戯言を、夜は小さく包み込みゆつくりと更けていくのだった。

一方、同時刻のアルフイン北端夕紅の森では・・・

「リンクのばかあ・・・」

御年200歳、魔術界の権威サラライ大先生はキャラ崩壊を起こしていた。

リンクがリンクになり、宮仕えに出てから一週間。

健気なリンクは毎日のようにサラライに手紙を書いていた。

それは嬉しい。最高に嬉しいのだ、が。

「なんでこんな楽しそうのかな、リンクちゃん・・・」

最初の3日間くらいは寂しそうな文章で早く帰りたいと綴っていた。それから徐々に手紙の登場人物が増え、寂しいという文字が減つてきた。

そして今日。

『サラライへ

』うちに来て一週間が経ちました。

今日は他のチームの人たちも交えてターレ飯を食べたよ。

なんとカイの手作り！すごく美味しかった！

サラライにもいつかカイの作ったご飯、食べさせたいな

第一騎士団は男の人ばかりで最初はむさくるしかつたけどだいぶ慣れだよ

シュラフなんて女の子みたいだしね！

でも、みんな私のことも女の子みたいって言うんだよ

魔法だからバレないけど、今日なんか体触られて確認までされたんだから！

参っちゃうよね！

じゃあ明日も早いから今日は寝るね。おやすみ。

リンより』

突っ込みどいろが多すぎるよ、リン！

カイの手料理じゃなくって私が食べたいのはリンの手料理です！

つてゆうかリンです！（ライ

男の人ばっかりってめちゃくちゃ心配です！

体触られたって参っちゃうつてベルじゃないでしょ！

ああ・・・

親の心子知らずと云うが、女の子には男心ってわからないものなんですね・・・

しくしく・・・・リンの世界でタイイクズワコと呼ばれる姿勢をとつてこじけてみる。

富士えは一年間。

しおりばなの週間でもういのちまである。

これからどうやって生きていけばいいのや。」

200年も生きてきたのに、なかなか名案が浮かばない。

いじいじしていると、窓から「シシシ」と音がする。

窓を見れば、赤の羽色が美しい大きな鳥が窓を突いている。

「こんな時間に誰でしょつねえ」

きっと誰かの使い魔だろ？

窓を開けてやると、手紙らしき巻物を置いて一礼する。

巻物の封印を解くと、光の塔と呼ばれる魔術研究の中心機関からの書簡だった。

なにやら3ヵ月後に王立魔術学院の入学式があるから出席してくれ、
という内容だ。

いつもなら考える暇もなくお断りする話だが、今回はふと考える。
これは王都に出るいい口実になりそうだ。

リンクに会いに行くついでに入学式に出席すればいい。

既に主目的が摩り替わっているが、そんなこと気にしないサラ大
先生。

ありがたく出席させていただきますと書きこみ、封印をし直して、
鳥に渡す。

「さあ。これでしばらくは楽しみができますね。」

一人うふふと笑うサラ大を残して、鳥は夜の空へと再び滑空してい
つた。

2・4 「それぞれの想い」（後書き）

サラライが予想以上にキャラ崩壊を起こしてしまいました。笑
これからちょっとずつコロンの知らないところで様々なことが起こり始める予定ですので、これからもよろしくです

2・5 「騎士団のオットメ」

第一章4話「騎士団のオットメ」

「最近、アルフィンの都では不穏な噂がまことしやかに囁かれていた。

「四天子が復活する」

それは均衡の終結。

100年前に終わった大戦の再来を意味するであろう悲劇の序章。

アルフィンの北に位置するギアルという大国。

100年前の大戦は、この国から始まつた・・・

というより、この世界で起こつた歴代の戦争はほとんどこのギアルから始まつている。

四天子・・・またの名を死天子、破滅の使い。

3000年前に遡るギアル建国から脈々と受け継がれる破壊の遺伝子達。

山脈に囲まれ一年のほとんどが冬といつギアルの情報はほとんど外部に漏れない。

そのため四天子についても詳しいことはまだわからず、ただただ恐ろしい存在として他国に伝わるのみである。

彼らの復活とは、それぞれ4血脈の頭目達が十分な力量に達し、再び四天子が集つたことを意味する。

噂はただの噂だと流してしまえば、たしかにそれだけのことだ。しかし、火の無いところに煙は立たないというもの。

再び起つた大戦への不安は、アルフィンの都に少しづつ翳りを
与えていた。

リンクが朝目覚めると、いつも以上に外が騒がしかった。
寝坊したかな？ちょっと焦りつつ、身だしなみを整えてドアを開け
る。

すると、中庭に小さな人だかりができていた。

『以下のチームに所属する者は一週間後の騎士団合宿に参加するこ
と。

チームフライ

チームゼクス

チームラシュオン

尚、この合宿への参加は強制である。

詳細については本日正午に団長室にて説明をするので各員出席す
ること。

団長カムイ＝リオリスター＝ブラシド

フォーデ』

なぜだろ？

この張り紙前に集まつた野郎共は、リンクを見ると同情するかのよ
うな目を向けてくる。

慰めるように肩をぽんぽん叩く者までいる始末。

状況を飲み込めずゼクス達を探すが、ネボスケ達はまだ夢の中にい
るようだ。

「リンク。ちょっとこうこうこう。」

ん?と人垣越しに振り向けば、カムイ団長。おはよひさいりますと挨拶をすると、伸びてきた腕にくしゃくしゃと頭を撫でられた。

毎度ながら、この小動物扱いには困ったものである。

「お前、まだ状況が把握できていないみたいだなあ。

ちょっと説明会前に話しておぐか

人の波に潰されそうになつていると、急に腕を掴まれて救出される。その勢いのままカムイの胸の中につっぱり収まつてしまつた。

「・・・・・つあ」

条件反射なのだろうか、ぎゅっと抱き締められてしまつ。カムイ本人も自分の行動が予想外だつたらしく、硬直気味だ。

(ええええ? ? ?)

力強い両腕と厚い胸板で抱擁されて、不本意ながらもドキドキ・・・

。魔法で外見を男のリンクにしたつて、中身は女の子のリンなのだ。抱きしめられて顔が見えないことを幸いに思いつきり赤面する。

「・・・・あ、あのう・・・?」

しばしの沈黙を経て思いきつてカムイに声をかけると、びくつと反応があると同時に拘束する力が急に弱まつた。

「すつすまない！－！」

一応はお偉い団長のくせに土下座しそうな勢いである。
お前がちょうどいいサイズで・・・とか、昨日はあんまり寝てなくて頭が・・・とか消え入りそうな声で言い訳をまくしてている。

（・・・なんか可愛い）

大男が真っ赤になつて謝るなんてそう見れるもんではない。
思わずふふふと笑つてしまふ。

「・・・お前。人が必死に謝つてんのに・・・」

不本意そうに背ける顔はまだほんのり赤い。
なにはともあれ・・・この団長のことをリンクは嫌いになれそうにもなかつた。

* * * * *

「ど、まあそんな感じだから頑張つてくれ。

リンクは新人なのに申し訳ないが、ゼクス達がいれば大丈夫だと
思う。

なにかあつたらすぐ俺に言つて欲しい。」

「・・・はあ。」

人だから離れベンチに腰を下ろし、騎士団合宿なるものについての説明を受けた。

騎士団合宿とは現在10に分けられた騎士団合同で行つ年に一回の合宿で、恒例行事となつてゐるらしい。

まあ、ここまでの大枠を聞けば、いたつて普通の行事。

が、補足事項を聞いてようやく先ほどの団員達の様子に納得がいった。

第一騎士団から第十騎士団までを統括する王国騎士団。

。 その団長、つまりは総団長ともいふべき人物が超がつぐどS・S・S。

そんな人物が主催する合宿もまた当たり前のようになります。正直、毎年のように負傷者、逃亡者が発生する合宿なんて聞いたことがない。

「コンク――――ウ」

自分の不運を呪つて空を見上げていると、ゼクスと思われる声の主が空を滑空する。

人間って空を飛ぶもんだっけ？

つとカムイの上に着地した。

「さうをどうがつぜクス！」

巻き添えを食らつたカムイの上でゼクスが腰をさすつてゐる。この男、静かに入場することができないのだろうか。

「団長お～わつきはリンクの」と抱きしめてたつて聞いたぜ～
なーんで俺には開口一番にどけ！なんだよー？」

突然のゼクスの反撃は見事な会心の一撃となつたようだ。
にやにやするゼクスとは対照的にカムイは真っ赤になつてゐる。

「ほ～お。なーんも言えんつーことせ、図星か団長?
うちの可愛いチーム員に手え出すんなら、先にリーダーに言つてくれんと、なあ？」

カムイに跨つたままで高笑いをするゼクス。

イケメン同士とは言え、残念ながらゲテモノ級の画である。

「ゼクス。いい加減にしてよ。」

「…・・・ううだ」

呆れたよつな声がふたつ。予想に違わずショラフとカイの登場である。

「おお。やつと来たか。遅いぞお前ら。」

「ゼクスが急に走り出して飛ぶからでしょ。馬鹿なんだから。」

「…・・・間違いない。」

ほつとけばいつもの不毛なやり取りに発展しそうである。

「ねえ、ゼクス。僕に用があつたんじやないの？」
「つあえずやんわりと止めにほじつてみる。

「おお。そうだそつだ！掲示見ただろー合宿だよー。」

そういうればさつきゼクスは去年も参加したつてカムイが言つてたつけ。

各団から団長チームを含めた4チームずつが参加するのだが、選出されるチームは合宿に耐え切れると思われるチーム、つまり有望株

を揃えるんだとか。

ゼクスのことだおおかた「めんどこ」だの「だるい」だの言ことこに来たんだらうつて次の言葉を待つ。

「めでやめでや楽しみだなッ……みんなで旅行だ!..

・・・。

その場の空気が固まつた。

馬鹿もじこまでくると天晴れなものだ。

「頼もしいな、ゼクス。だが、いい加減俺の上からじかないか?」「おひ。団長。まだここにいたのか。」

ゼクス以外全員のため息が重なる。

・・・リンクの命宿への不安が一気に加速したことほつまでもない」とだった。

2・5 「騎士団のオシトメ」（後書き）

久々の更新です。

プライベートの方が忙しくなつてきたのでちょっと更新が遅れるかもしれません、ちまちま頑張つていきます。

これからちょっとずつリンクちゃんの周りで事件勃発していくますので、応援よろしくです。

第一章 6話「泊二日目のマジ合宿」

あるへひ もりの一なかあ くまさあんこへ 出え会つた

規則的な馬の蹄の音とゼクス閣下の素つ頬狂な歌声が森に響く。
森の空気が心地よく、思わず鼻歌を歌つていたらゼクスにその歌を
教えるとせまがれたのだが・・・

今更だが、ゼクスに歌といつ凶器を『えたことに氣づくリンク。
これから始まるであらつ恐怖の一泊二日を田前に早くも戦前逃亡し
たいくらいだ。

後方から続く他のチーム達も同じ心境らしく、ゼクスに恨みがまし
い目を向けている。

「あと2・3キロで着きますので、みなさん覚悟を決めてください
ね」

げつそりとした団員達に苦笑しつつも頷くのは副団長のワ
イスさん。

カムイは合宿に先駆けての団長会議があるとかで昨日のつまに団を
発つていた。

あと2・3キロといつ宣言通り、合宿場となる古城めいた建物はぐ
んぐんと近づいている。

静かな森の中に佇む美しい古城。

これが合宿でなく旅行だったなら、どんなに嬉しいことか。

突如、ゼクスの歌声が途切れる。

「奴さん、早速のお出迎えときやがつたぜ？」

いかにも楽しげな口笛までおまけにつけて、ゼクスがにんまりとす
る。

はて、お出迎えとは？と視線を前方に移せば、武装した騎士達の一
団。

その様子はとてもお出迎えなんて言えるものではなく、明らかに臨
戦態勢といったところか。

「さあ、始まりましたよ。

着く前にやられたなんてことになつたら第一騎士団の恥ですから
ね。

準備体操がてらに暴れてきてください。」

相変わらず朗らかだが言つてはいることはかなり物騒なライスさん。
ここにいる全員が真剣を帶びてはいるものの、出発前に一度集められ、
稽古の時と同様に刃が切れなくなる魔法をかけられている。
好き放題暴れても命の危険はないということか。

もともと暴れる騒ぐは第一騎士団の得意分野。

先陣を切つて突っ込んでいつたゼクスに、皆意氣揚々と従つた。

「あ。言つ忘れてましたが、向こうは王国騎士団の方々ですからね
とかいないとか・・・
えー」

ライスさんの相変わらず明るいが遅すぎない一言が聞こえた者はいた
とかいないとか・・・

満身創痍、とはいつこう時に使つ单語なのだろうとコンクはほんやり考えた。

最初だからまだ大丈夫だろうと勝手に見積もつたのがそもそもの間違いだつたようだ。

お出迎えに来てくださつた方々はなんと、泣く子も黙る王国騎士団幹部様、一行だつたのである。

こつちの戦力は17人、対する相手は5人。

楽に勝てると思ったのも束の間、ぱつぱつとなぎ倒されて、こちらのほとんどが落馬の上に氣を失うはめになつた。

リンクはと言えば持ち前のすばしっこさで逃げの一 手。

ゼクスは落馬してもめげずに根性と底無しの体力で絡み続けた。シユラフとカイはコンビネーションを發揮してうまく応戦していたようだ。

残りのチーム達は氣を失つか戦意喪失して場を見守つていた。ライスさんと他団長チーム員2名はこれも予想の範囲内だつたらしく、今は怪我人の手当てにまわつている。

「第一騎士団のみんな、お疲れ様です。騎士団合宿へようこそ。」

先ほど戦つた騎士のうち一人が残り、なにやら挨拶を始めた。他の4人は後方から来ている騎士団のお出迎えに向かつたようである。

「私は王国騎士団のフランスです。今から皆さんを合宿の舞台となるラインシコタット城へご案内します。

第一騎士団はなかなか出迎え甲斐があり、楽しかったですよ。」

爽やかな笑みを浮かべるフランス氏だが、壮絶なお出迎えの後となるとなんだか胡散臭い。

「ああ、姫がお待ちですの。」

ん？姫がいるの？

合宿初参加のメンバー達は一様に皿をぱちくりとせる。

一方のライスさんやゼクスをはじめとする合宿経験者達はげんなりした顔つきだ。

不思議に思ったリンクは姫？とゼクスに問うが

「ま、楽しみにしどけ。べっぴんさんだからな。・・・」

ゼクスの呟きに初参加陣がわあっと盛り上がる。

その後に続いた「・・・中身は保証しないがな」というぼやきは綺麗に搔き消され、リンクの耳にも届かなかつた。

* * * * *

ラインンシユタット城に着くとまず合宿の間滞在することとなる部屋へと通された。

5人一室の相部屋。

以前、古城を改築したホテルの写真を海外旅行パンフレットで見たことがあつたが、まさにそのものといった感じだつた。

窓から見える景色も一等級。

「見て見て！中庭の湖！白鳥が泳いでるよ。」

「白鳥つて食えんの？」

「ゼクス。あんた何でも食おうとするのやめなよなー。・・・多分、食えない・・・」

窓から外を眺めたりふかふかのベッドで飛び跳ねたり、気分はもう

修学旅行だ。

出発前のゼクスの言葉に呆れていたことも忘れ、リンクはすっかりはしゃいでいる。

夜は酒盛りだ枕投げだと4人ではしゃいでいると、ふと扉にノックする音がする。

「どうぞ。」

ショーラフの返事と共にゆっくりと開く扉。
そこには黒髪の青年が立っていた。

「え？ だんちよ・・・？」

呆けたように眩くリンクに、カムイそっくりの青年は嫌悪感たっぷりの聲音で答える。

「あんな奴と間違えないでくれないか。

私はスライだ。新入りが入ったなんて聞いてないぞ。」

後半はゼクス達に向けられた言葉だったようだ。
ゼクスにしては珍しく氣難しい顔をしてる。

「よお、スライ。久しぶりじゃないか。

この子はリンク。引きこもつてお前と違つて、新入りなのによく頑張つてくれてんぜ」

「よく言つ。飲んでばっかりで仕事もうくにしてないよお前達に頑張ることなんてあるのか？」

ショーラフは相変わらず家出中か？お父上はまだぞかし恥じておられるだろうな。

カイも腰巾着のまま。弱小貴族の「こ子息は苦労するな。同情する

190

ふつと鼻で笑うスライと名乗る青年は完全に上から田線だ。いつも笑顔を絶やさないカムイとは顔は似ていても、全く違うところは思った。

同時に、切れた。

「あんた！さつきからぐちぐちぐちぐち……何様なの！！
どんだけ偉いのか知らないけど、あんたにそんな失礼なこと言う
権利ないんだから！」

スライの田の前までずんずん迫つてまくしたてる。

形になるが、威勢だけは素晴らしいものだつた。

「失礼な女だな・・・」
「なつ？！僕は女じゃないぞ！」

女だと聞かれた夥はず黙つてしまひ。

サライの魔法はほぼ完璧だが、まれに魔法抵抗力が強い人間にはもとのリンクの姿が見えてしまうというからなおさらだ。

ただ童顔だから女に見えただけならよいが、この陰険な男にはれた
としたら大変なことになるだろう。

「リンク。その辺にしとけ。」

肩に温かく大きな手を乗せられて振り向くと、いつの間にやらカムイが立っていた。

「お、お前、うー！」

「スライもだ。大人げないぞ？」

突然のカムイの登場に挙動不審なスライを見て、カムイはいつもの笑顔を浮かべている。

だがリンクの目には、その表情は悲しそうにも皮肉な笑みにも見えた。

「もうすぐ集合の時間だぞ。みんな中庭に集合してくれ。」

いつの間にやら時間が経っていたようだ。

廊下には移動し始めた騎士団員達の流れができている。

合宿早々に遅刻など御免こうむる。リンク達は慌てて中庭への流れに混じった。

「・・・というわけで、さっきのスライっていう奴はカムイ団長の弟で、うちのチーム員なんだ。」

中庭に集まつてお偉い様の到着を待ちながら、シュラフから説明を受ける。

いつも騎士団の活動に参加していないのは、他機関で魔術研究にも従事しているために特別に許されているらしい。

まあ、毎日来ない理由にはなつていながら、彼の家柄上、誰も文句は言えないようだ。

当のスライはといえば、今も離れたところにジゼのエリート騎士団員と談笑中。

チーム」とに集まつていろいろといつ命令を元壁にスルーしている。

「団長と顔はそつくりなのに、なんであんな性格悪いの？」

「まあ団長さんとの『ラッシュドフォード』一族は・・・」

苦笑いを浮かべ語り出したショーラフの声をセベギットで鐘の音が鳴り響く。

中庭の中央に作られた石造りのステージに、一人の女性が上つていいのが見える。

ルビーのように真っ赤な髪は腰のあたりまで届き、ゆるやかな波のようである。

瞳を彩るのもまた赤。

それらの色彩は彼女の勝気な表情を際立たせていた。

「べつぴんさん」「姫」・・・ゼクスや王国騎士団員の言葉が脳裏に蘇る。

姫といつよつ女王といった方がしっくりくるなとリンクは惚れ惚れと彼女を見上げた。

「皆のものー今年も騎士団合宿への参加、感謝するぞー。」

先ほど今までわいついていた中庭が、彼女の一言で一気に静まる。

「私は王国騎士団長を務めるマリア＝リオリスター＝ラッシュドフォードである。」

おおーーーと湧き上がる場内を尻目に、しばし固まるリンク。
え？この綺麗なお姉さんが、例のドリの王国騎士団長？
しかもブラックドフォードってことは・・・！

騎士団合宿初日、早くもリンクの頭は沸騰寸前だった。

2-7-1 油井田のマツコ会議2（前書き）

久々の更新です。申し訳ない
自宅PCの調子もよくなつたので、今後は更新きちんと進めたいと思
いますので、よろしくお願いします。

第一章 7話「一泊二日のマゾ合宿2」

騎士団合宿初日は、まさに「てんてこ舞い」といった様相で過ぎていった。

今は大広間での夕食中だが、周りを見ればみな一様にケガを負つたり顔色が悪かつたりと満身創痍である。

そんな中、リンクは大はしゃぎ。

「これってキャビア？！あのセレブ食キャビアなの？！」
「やーばーいッ！」のお肉一口の中とりけるー！

頬を紅潮させ興奮するその様は、非常に愛らしいものだ。
が、みな疲れ果ててている中できやつときやと騒ぐ彼女はかなり異様である。

更にリンクの隣に居座るゼクスはいつもと変わらぬ様子で皿に付く限りの食べ物・酒をかきこんでいるし、ショラフとカイも上品に食事を楽しみ、ワイン談義などしている。

「第一騎士団とのゼクスチームの奴ら、化けもんだろ・・・」

周囲のため息など知りもせず、4人は合宿を心から楽しんでいた。
そこへ、カツツカツツと兵士のものではない足音が近づく。
ふつと4人が顔を上げると、そこに立っていたのは騎士団長。
あまりの唐突な登場、そしてなによりも彼女自身が放つ威風堂々たるオーラに気圧され、しばし時が止まつたかのような錯覚に一同は包まれた。

「へえ。今年は可愛い子が一人もいるって聞いてたけど、ほんと可愛いわねー！」

・・・・ハイ？

たっぷりと間をおいて彼女が発した言葉は、誰しもの予想を裏切るものだった。

よくよく見ればメアリ騎士団長の頬はうつすらと紅潮し、握り締めた両の手は心なしかわなわなと震えているように見える。

シュラフとリンクはさながら蛇に睨まれたなんとやら。ゆっくりというかじりじりと歩み寄つてくる騎士団長を田の前に完全に硬直していた。

周囲も「これから何が起ころるんだ？」といった期待や不安が蔓延し、先ほどまでざわついていた大広間は水を打つたように静かになっていた。

「やーーーんッ！もう食べちゃいたいくらい可愛いっ……」

静寂を突き破る絶叫。

そして、ガターンと椅子が倒れる音が続き。

・・・大広間中のみなが正気に戻ると、そこにはシュラフとリンクを抱きしめ頬ずりする騎士団長閣下の御姿があつたとな・・・

「だ〜か〜ら〜何度言つたらわかるのです姉君ーー！」

大広間での一件から一時間後、ここは騎士団長室である。部屋には青筋を立てて叫ぶカムイ、困ったように笑うフランツ以下騎士団長付き騎士の面々、そして・・・メアリ騎士団長となぜかそ

の膝の上にひよこさんと座る顔面蒼白のリンクとショウ。

「カムイのわからずや！私は！」の子達が欲しいの！」

そう。大広間での一件の後、メアリはリンクとショウを自室へと誘つた。

（注・誘つたといつより連行したといつほうが正しいが、こじはメアリの名誉のためにも誘つたと言つておこう。）

それを慌てて追つたのがカムイや団長お抱え騎士達。
可愛い子猫ちゃん達（メアリ談）との逢瀬を邪魔され、メアリはいたく不機嫌だつたが、二人がカムイの第一騎士団所属と聞くやいなや様子が一変した。

端的に言えば「子猫ちゃんを寄越しなさこよ」というわけである。基本的に団長権限を使えば人事は一発決定なのだが、見習い期間であるリンクはそうもいかない。

所属団の団長であるカムイが許可・推薦という形をとらなければ、異動できぬ。

「ですから、姉上。二人は我が第一騎士団の主力メンバーであり、彼らを欠くことは考えられないのです。私情による勝手は慎んでください」

メアリの膝の上で、リンクは思わず赤面してしまつ。

カムイが自分をそのように買つてくれていたなんて知りもしなかつたのだ。

騎士団合宿に選ばれたことだけでも嬉しかったのに、こんな形で認められていると公言され、なんだか嬉しいやら照れるやら・・・である。

「私情がなによ！あんただつて子猫ちゃん可愛いなはあはあとか言

つてんでしょ！」

「はあはあツ？！あ、姉上？！」

「あんたの可愛いもの好きくらい知つてんだからねー・あんたみたい
な変態のとこには危なすぎて置いとけないわよー！」

「なつ！・・・自分も変態のくせに何自分棚の上にあげてんだこの
馬鹿姉！」

「馬鹿姉ですつて？！いい年してぬいぐるみ抱いて寝てるあんたに
言われたかないわよ！」

「あんたこそ王国騎士団に自分好みのイケメン揃えやがつて！」

「なによ！イケメンで強くて最高じゃない！萌えよー・萌えの極致だ
わ！」

「本性晒しやがつたな！」

・・・以下略・・・

黙つてればいい男いい女。

そんな姉弟が顔を突き合わせてあられもない内容の喧嘩をする。
その横では目のやり場を失つた同席者達が互いに哀れみのよつた視
線を交わす。

・・・ハツキリ言つてどうしよつもない。

示し合わせたように同席者一同、ため息。

そんな中、すつくと立つたのはリンク。

「いい加減につっしてくださいッ！」

ぐわつと効果音が付きそうな勢いで姉弟が振り向く。

二人のあまりの目の据わりようにヒツと一步引いたリンク。

しかし、突進してきた二人の前ではその一歩などなんの甲斐も無かつた。

「「怖がらせて」」めんねええ―――」

いや、怖かったのは喧嘩じゃなくて今のあんた達だよといつ突っ込みも一人の耳には届かないようだ。

奪い合いつぶつにリンクを抱きしめる。

「あの、とりあえず、リンク君とショーラフ君自身に意見を聞いてはどうでしょうか?」

リンクを救つたのはフランスさんの提案。

「確かに、それが妥当ね。」

「おう。それなら間違いないな。」

両者共に自分が選ばれると自信満々なのか、目が爛々と輝いている。

「まず、ショーラフ君はどう思いますか?」

「もちろん王国騎士団よね?子猫ちゃん!」

「仲間と別れるなんて嫌だろ?ショーラフ!」

フランス・メアリ・カムイの言葉が重なる。

ショーラフ本人といえば、冷めた目で一同をぐるつと見渡し

「僕は・・・リンク君に任せますよ」

と、にっこりと笑つた。

傍から見れば天使の笑顔だが、「さあて、面白いもんが見れそうだ。楽しませてねリンク?」と脅迫めいた意味が付されていふといふにはリンク以外知りようもない。

(ショーラフのばかああーーー!)

この世界に来てから修羅場は何度か見たが、この時ほど逃げ出した

かつた」とはなかつたとリンクは後に語つたといつ・・・。

* * * * *

「ほ、僕はつ・・・」

ずいつとにじり寄る変態姉弟。

勘弁して欲しい。

美形の癖に変態。

この世界の定番といえば定番なわけだけじ。

一人揃われると、正直、太刀打ちできる気がしない。

枯れそうになる喉を必死に絞つて声を出す。

「僕はつ、カムイさんのところで働きたい、で・・す」

後半に行くにつれて声が小さくなつたのは認めるが、我ながら頑張つたと思う。

目の前の二人はと/or>うと?

両者共には呆けたような顔である。

さすが年長者とでもいうか、先に呪縛が解けたのはメアリ。

「子猫ちゃん! カムイが上司だからつて氣を使わなくともいいのよ
?」

リンクの頬に両手を添えて囁くメアリの顔を見て、本当に綺麗な人だなあと場違いも甚だしいことを考えてしまつ。

しかし、それとこれとは別である。

ふうつと一息ついて、説明を試みる。

「メアリ騎士団長のお誘いは本当に光栄ですし、嬉しかつたです。

お誘いを断ることがどんなに馬鹿なことかもわかっています。
でも、今は・・・僕達を戦力として認めてくれているカムイ団長
の下でカムイ団長のために働きたいと思つんです。」

一気に話しながら顔が赤くなるのがわかる。

一介の駆け出し騎士団員が王国騎士団の誘いを蹴るなんて、どんなに馬鹿な行為かくらいわかつていた。

でも、どうしてもカムイのことが頭から離れない。
たつた数ヶ月。

ゼクス達のように常に一緒にいるわけではない彼。
それなのに、いつも見守られているような気がした。

落ち込んでいるとどこかしらか現れて何時間もただ隣で話を聞いて
くれた。

巡回中に「ロロツキをとつちめた日には、頭を撫でてくれたっけ。
思い出せば思い出すほど、カムイの下で働きたいという思いが強くな
る。

そして、さつきの言葉。

カムイが自分を必要としてくれている、それがたまらなく嬉しかつ
た。

ぬいぐるみフリークの可愛いもの好きの変態でも構わない。
それでもいいから、彼のために働きたい。

戦場でもし誰かのために死ぬとしたら、彼のために死にたい。
自分でも制御不能なくらいに、色々な感情が溢れ出した。

「リンク・・・ありがと」

ふと我に返るとリンクの頬には幾筋かの涙の跡が残り、体はカムイ
の腕の中にすっぽりと収まっていた。

ぽんぽんと背中を優しく叩かれ、ああこんなにこの人の腕の中は安
心できるんだ、と微笑む。

「まつたくー。これじゃあまるで私は噛ませ犬じゃない？」

しまつた！とばかりカムイを押しやり、メアリ騎士団長に向き直る。どんな鬼の形相が待ち構えているだろ？と戦々恐々と目を向けたわけだが、目に飛び込んできた彼女の表情は、予想外にも晴れやかな笑顔だった。

メアリはケラケラと笑つてカムイにつめよる。

「変態だとは思つてたけど、ついに美少年に田代めちゃつたわけえ？？

「ちよいと話を聞かせなさいよ~」

いわゆる腐女子は、異世界にもいたようである。

自分の弟がまさかねえとかぶつぶつ言いながらピンクの手帳になにか書き込んでいらっしゃる。

ネタ帳とかいうやつだらうか・・・。

「あ、あの～・・・」

メアリの様子に不安を感じたリンクが声をかけると

「大丈夫よ、リンクちゃん！カムイと引き離したりなんかもうしないわ！」

その代わり・・・たまに王国騎士団に顔出して近況報告してね？つまり、その・・・ね？ABCとか？？？きやあ～～

「へ？？？」

自分で言つて自分で赤面する騎士団長様。

リンクはわけがわからず呆然。

シユラフは部屋の隅で腹を抱えて笑っている。

「リンク・・・おまジハ」ふつ

の言葉が、心から願つたことである。」

殘念無念

その科白が最後まで紡がれることはなかつた。

部屋の外で成り行きを見守つていたゼクスとカイが雪崩れ込んだついでに、カムイに衝突したのだ。

「リンクーー！やっぱ俺達と離れるなんかありえねーよなー！」

一瞬前までカムイがいた場所にはゼクスが陣取り、リンクの頭をわしゃわしゃ搔き撫でる。

なにが何で、カムイにはもう手ハリまでいるね！」
シユラフちゃんにも相手がいるの？！

支那の歴史

腐女子はゼクス・カイを見逃さず、再び湧いている。カムイはまだゼクスの足元でびくついている。

「もう意味わかんないつつ――の――！」

リンクの絶叫虚しく、合宿初日の夜は刻々と更けていくのでありました。

第一章8話「一泊二日のマゾ合宿3」

目が覚めでまず田に入ったのは鮮やかな赤。

そして、ぼやけた視界を広げていくと僕の隣にはとびきりセクシーナ美女・・・。

「ひいぎやあ―――っつ?!

「なつ!敵襲か?!

「・・・リンク。静かに起きれないの?・・・」

そう。そうなんです。

僕はすっかり忘れていました。

昨晚、「リンク君とシュラフ君が一緒に寝てくれないと私、もう騎士団長やめるんだから!」と凶悪な駄々を捏ねたメアリ騎士団長。反対するカムイ団長を半ば無視する形で、結局、メアリ騎士団長の部屋で寝たんだっけ。

まだドキドキしている胸を押さえてとりあえず深呼吸する。

「・・・あ。おはよひざいます。」

枕の下に隠していたと思われる短刀を握り締めるメアリ騎士団長とめちゃくちゃ不機嫌そうなシュラフに、テヘッと効果音がつきそうな挨拶をする。

寝起きが悪い悪魔様には当然こんな誤魔化し効くわけないが、イケメン大好き騎士団長様には効果抜群だったようだ。

朝っぱらからいやーんと萌えていらっしゃる。さすが腐女子。寝起きもあくまで腐女子。

半ば呆れ顔でメアリ騎士団長の抱擁を受け流しつつ、とりあえず自分の真操（？）が無事だったことにほっとするリンクだった。

シユラフの機嫌も直つたところで、三人は連れ立つて大広間へ。ちょうど朝食と朝礼の時間だったようで、団員達はみな席に着いていた。

「「「おはよ〜い」ぞいますメアリ騎士団長ツー！」」

大広間の窓ガラスがぴりぴりするような大音量の挨拶。

どんだけ体育会系だよ！と内心で毒づくが、団員達はいたつて真剣である。

メアリに腕を引かれ上座の王国騎士団席にすすると連行される道のり、ものすごーく視線が痛かった。

穴があつたら入りたいというのは、こんな特殊な状況でも使えるんだなあ・・・昔の日本人つてすごいなあ・・・と半分麻痺した頭は無意味なことを羅列する。

が、腐女子はそんなリンクの思考に気付くはずもなく、満面の笑み、シユラフも注目の的であることがまんざらでもないらしく、これまた満面の笑みである。

一晩で噂が広がったのか、みなだいたいの流れは把握しているようだ。

噂の主役三人が朝から連れ立つて登場したことによつて着くであろう尾ひれ背ひれ以下略については想像もしたくないといったところだが・・・。

昨日まで5人分だった王国騎士団席はちゃつかり一人分の席が足され、メアリ騎士団長の両隣にリンクとシユラフは案内された。

お口アーンや過剰なスキンシップそしてカムイの強烈な視線攻撃を

除けば、朝食は滞りなく平和に終わった。

そしてそのまま場が朝礼へと進み、衝撃は走った・・・。

「・・・と、今日の訓練は以上の説明の通り。各人、鍛錬に励むようだ。

そして、第一騎士団のリンク・シュラフ両名は私の護衛についてもうべつ。

大輪の花の如き笑顔の騎士団長様とは対照的大広間の騎士達は各自あらん限りの驚愕の表情を浮かべた。

（お、俺のメアリ様があ・・・）

（いや、メアリ様。あなたほど強ければ護衛なんていらんでしょう。）

（100%私情というか欲望だろつそれ！）

（実はイケメン大好きミーハーだつて噂はマジだつたのかよ！）

しばし、これでもかという程の突つ込みが各人の中で行われた。

美貌のD.S騎士団長として憧憬・崇拜の頂点に立っていたメアリ騎士団長の意外過ぎる一面。

みんなの驚きは並大抵なものではなかつた。

しかし、当の本人といえば大広間に広がつた、否、自らが広げた波紋も気にすることなく「今日一日よろしくね子猫たち」などとにやけ面である。

嗚呼、哀れなり騎士団長の崇拜者達。

* * * * *

そんなわけで、リンクは今、メアリ騎士団長の右膝の上。

眼下ではD.S騎士団長がよなべで考えたD.Sな訓練が行われている。隣には訓練をサボれてゴキゲンなシュラフがメアリ騎士団長と談笑中である。

なんてカオス・・・。

悄然とした顔でぼんやりと訓練の様を見つめていると、なんだか様子がおかしい。

よくよく見れば、赤い物体が動く先々で混乱が起き、ぱたぱたと人が倒れるパターンを発見した。

さらに赤い物体に目を凝らすと・・・それはゼクス。

「ゼクスつたらまた暴れてる。ほんと馬鹿なんだから。」

「子猫ちゃんとのチームはほんと面白いわねえ」

シユラフとメアリ騎士団長もゼクスに気付いたらしく、楽しそうに眺めている。

さすがドンビ・・・。

鈴を鳴らしたような可愛らしい笑い声を一人が上げる様は、バックに花を背負い込みそうなほど美しいが、悪魔の耳と尻尾を見逃してはいけない。

苦笑いを抑えつつ再びゼクスに注意を戻すと、ゼクスもこちらに気付いたようである。

二パフ という効果音付きの笑顔で両手をぶんぶん振つてくれる。なんだか猛獸を飼い馴らしたような気分で思わず笑つてしまつ。それを見たゼクスはなにやら安心した表情でまた移動を再開し、混乱と悲鳴も同時再開した。

リンク・シユラフは、あと30分もあれば、半分くらいの騎士が地に膝着くことになりそうだなあと頭の中で軽く計算した。

「さあて、そろそろ夕食時だね。

子猫ちゃんとの赤いやつも、もう満足したひつよ?」

メアリ騎士団長もゼクスの活躍に大満足だったらしく、『機嫌な様子だ。

彼女が右手を擧げると、それが合図だつたよつて名騎士団長が集まつてきた。

当然ながら、どす黒い不機嫌オーラを背負つたカムイも、である。

「姉上、いえ、騎士団長殿。いつまでうちの団員をお膝の上に置かれるつもりですか？」

今にも噛み付かんばかりのカムイの様子がさほど面白かったのだろうか。

メアリはからかうような口調で応酬する。

「ほう？」一人は私の護衛なのだから、私の一番近くにいるべきと判断したが・・・

なにか問題でもあるのか？カムイ第一騎士団長よ。」

「失礼ながら、一人が騎士団長殿を護衛しているとこりよつては騎士団長殿が一人を愛玩しているよつてお見受けしますが」

昨晩の姉弟喧嘩に比べれば言葉は丁寧なもの、一人の間に流れる空気が険悪なのは間違いない。

といつても、メアリは樂しみ、カムイは怒り心頭、そこだけは違つようだが・・・。

「では、カムイ第一騎士団長。そなたには子猫を一匹進呈いたそつ。どちらがいい？」

完全におちよくつている。

「・・・姉上つ！おふざけもいい加減になさつてください！」

「ふざけてなぞおらんよ、私は
「だつたら何なんですか！下らない姉弟喧嘩に巻き込まれる一人の
身にもなつてください！」

メアリのふざけた提案に益々ヒートアップするカムイの怒りだが、
それに比例してメアリの心も刺激されるようである。

「今選ばぬというなら、一人には出張という形で王国騎士団に来て
もらつしかないな。」

「なつ……！」

頑として折れないメアリは新しい玩具を見つけた子どものように嬉
々としている。

小さい頃はさんざカムイを苛めて遊んだものだが、お互い成長して
そんなこともなくなり、カムイがいつちょまえに大人面をするよう
になつたのがメアリには寂しくもあつた。

戦い以外でこんなに高揚するのは久々だなとメアリはカムイを見つ
めながら意地悪な笑顔を浮かべる。

「ああ、選ばないのか？」

その場に居合わせた全員が緊張した瞬間だつた。
みながみなカムイに注目していた。

先ほどまで巻き添えを食らわぬようそ知らぬ顔をしていた他の騎士
団長や王国騎士団員達も、カムイの答はまだかと生睡を飲み込んだ。

「・・・・強いて選べと仰るなら・・・・リ・・」

「聞こえぬぞ？カムイ第一騎士団長。男らしくない。」

「・・・・！リフリンクを選びます。というのもシュラフは今の状況
を楽しんでいるようですし、リンクは見たところ・・・・」

「ははっ…あはっひっははは…」

カムイが早口に続けた必死の言い訳（？）はメアリの爆笑で搔き消された。

膝上の二人を抱えこむ形で腹を押されての大爆笑。

「…つよく言つたなカムイ！お前は眞の漢だ！あはは…」「姉上！！！ですからこれは団長としての判断であつ」

真っ赤になつて抗弁しようとするカムイだが、メアリに適うわけもない。

メアリはカムイと同じくらい真っ赤になつたリンクをひょいと抱えるとカムイの前に差し出す。

「ほれ。頑張つたご褒美だ。ショーラフも明日には返すから心配するな。」

ほぼ硬直状態かつ床に足がついていないリンクを受け取らないわけにもいかず、メアリの腕から奪い取るように受け取る。

一連の流れを見守っていた騎士団長達はなぜか安堵のため息をもらずと同時に拍手をした。

それにキツと睨みをきかしたカムイだったが、彼の必殺とも言われる鋭い眼光も顔を赤らめた状態では、からかわれた中学生の可愛らしい反抗にしか見えなかつた。

恐るべし姉！とでもいうべきか。

（なんだかいい物をみたなあと騎士団長達はこの時思つていたが、後にリンクが男であることを思い出し、ちょっとだけカムイの将来を心配したという話はこの合宿後のことなので、今は割愛しよう。）

「騎士団長殿。私はリンクと少し話したいので先に失礼してもいい

ですか？」

「ふふ。もちろんだともカムイ。

・・・だが、夕食後に団長会議を行つ。それには必ず出席するようだ。

「うう。

最後の一言を発したとき、一瞬だけだが、メアリには珍しく苦虫を噛み潰したかのような表情を見せた。

カムイもなにか感じ取つたようで、ふつと眉根を寄せた。

気丈な姉があんな表情をするのは珍しい。

だが、とりあえずはまことに針の筵といった感じのこの場から去るのが先決である。

カムイは小さく頷きリンクを抱えて歩き出した。

「」に行こうかと迷つたものの、結局、裏庭の噴水に行くことにした。

まだ硬直気味のリンクだが少し落ち着いたらしく、先ほどから何度も深呼吸を繰り返している。

壊れ物を扱うようにそっと地面に下ろしてやると、ぴくっと体が震えた。

（我が姉ながら的を射てるな・・・本当にまるで子猫だ）
真っ赤になつて必死に深呼吸する姿は背毛を逆立てた猫のようだ、
時折震える長い睫毛は艶っぽくも微笑ましくもあった。

「リンク・・・大丈夫か？」

「・・・ひあっ！・・・えと、だいじょ、ぶ、です！」

本当に大丈夫か？と問いたくなる返事だが、会話できるほどには回答したようだ。

「さうあは・・・すまんな。

昔から姉上は俺をからかって遊ぶのが好きなんだよ」

いわゆる体育座りで体を丸めているリンクの顔を覗き込むようにして言葉をかける。

一瞬目が合つたが、ふいつと逸らされてしまった。怒つているのだろうか。

逸らされた視線を無理に合わせることもできず、立ち上がり噴水を見つめる。

「懐かしいな・・・。実はこの屋敷、うちの家の所有なんだ。
小さい頃は避暑地として使つていて、父上に叱られたり姉上に苛められるといつもこの噴水脇で泣いてた」

ふいに口をついて出た言葉に我ながら驚く。

今はショーラフは楽しんでいたように思えたからリンクだと言つたんだと説明しなければならない時だというのに。
だが、意思に反して言葉は勝手に紡がれしていく。

「この噴水から見る向こうの山にかかる夕田、すゞぐ綺麗なんだ。
・・・そつちに生えてる姫林檎の樹からもいだ実を食べながらよく夕日を見たな。」

くすっと小さな声がして、リンクの方を見ると、彼はこいつを見て微笑んでいた。

「カムイ団長にも、そんな頃があつたんですね・・・
お姉さんに苛められてただなんて想像もつかないですよ?」

よかつた。笑つてくれた。

彼の笑顔でこんなにも安心できるなんて不思議でならない。

少年の笑顔で安心するなんて自分はやっぱり頭でもおかしくなったのだろうか。

「姉上は昔からあの鬼畜ぶりだったからなあ。」

「そんなまさかあ」

だが、口口口口と笑うリンクを見ていると、なんだかそんな不思議すらじうでもよくなる。

「だけどな、昔……」

「えつ？」

小さな悪戯心がむくりと起き出し、リンクの耳元に口を寄せ、メアリのちょっと恥ずかしい昔話を披露する。

暴露話を姉にささやかな仕返ししてやれと思つていた。だが、それ以上に、耳元に吐息がかかるたびピクリと反応するリンクが可愛くて仕方がなかつた。

内容なんて気もそろに、リンクの反応を楽しむ。

いつまでもこのささやかな暴露話が終わらなければいいと思つた。しかし、あくまで小話である。

永遠にも続くかと思われた甘いひと時は、リンクの笑い声と共に数分で幕を閉じた。

リンクがひとしきり笑うのを見届け、本来の目的を思い出す。

「……リンク。さつきは驚かせてしまつて本当にすまなかつた。

俺が冷静だつたらもつとマシな応答ができたはずなんだが。

俺がリンクを選んだのは……」

先ほどと同じように言葉を続けようとしたが、唇の上にすっと添えられたリンクの人差し指によって、それは阻止された。

「カムイ団長。もう謝らないで下わいよ。

なんだかんだって……僕、嬉しかつたんです。

昨晩は第一騎士団に必要だつて言つてもらえて、さつきは困つてたところを助けてもらつたんですから。

シコラフが楽しんでたのは僕にもわかつてたくらこです」

最後の一言には悪戯っぽい笑顔が添えられていた。

この子には、本当に敵わないな……。

コロコロと変わる表情にいつも魅了され、いつも笑つていて欲しいと必死にさせられる。

「さて。事情はわかつてもうえりみたいだし夕食食べに行くか?」

ふつと自分の感情の暴走に気付き、冷静になる。自分には探し求め恋焦がれる女性がいる。そして、なによりリンクは男だ。

きつと歳の離れた弟のようではつとけないんだ。

自分に言い聞かせるように思考する。

「あ。ちょうどだけ待つてもらえますか?」

「ん? どうした?」

「あの……夕日を、見たいんです。」

ふわっと笑むその表情に釘付けになつてしまふ。

弟、弟と念佛か呪詛のように頭で繰り返しながら、リンクの隣に腰を下ろす。

「 そうだな。」

それだけ呟いて、二人で静かに夕暮れを待つた。
15分そこらの静寂は穏やかに優しく、複雑にこじれた赤い糸に繫
がれた二人を包み込んだ。

若干スランプ気味で文章がつまへまとまりません。これいつもより更に読みにくかった文章、最後まで読んでいただきありがとうございました。

次章ではチョイ出だつたキャラや懐かしのサライトが登場予定です。よければ今後も読んでやってくださいね。

評価の方も、ばつとうじまつをつやつていただけます。ご嬉しく嬉しいです。

3・1 「変わらぬ日常」

第三章 1話「変わりゆく日常」

「暇だ！暇すぎる！」

一泊三日合宿も終わり、リンク達はまた通常任務に戻った。合宿参加者の大半は一泊三日が限界だと喜びいさんで帰還したが、ゼクスだけは別だったようである。戻つてからというもの、どこか呆けた顔で調子がでないようだった。

「面白くなーい。」

「・・・うまい茶だ。」

「平和だー・・・」

シユラフはシユラフでメアリとの絡みがなくなつて退屈がついている。唯一なにも合宿中と変わつていないのはカイくらいだらうか。

リンク本人はといえば、平和な日常のありがたみをひしひし感じていた。

暇を見つけるとお茶を淹れて日向ぼっこ・・・と、隠居のような生活をしている。

しかし、リンクには気になつて仕方がないことがあった。カムイが帰つてこないのだ。

「・・・団長は、どうしたのかなあ？」

「ああ。そういうや他んとこの騎士団長も屋敷に残つてたぜ。奴らだけで打ち上げ宴会でもやつてんじゃねえ？」

「メアリ姉さんに遊ばれてんじゃないの？」

「・・・わからない。」

リンクがふと「ほ」した疑問にそれぞれ勝手に答えを出す。しかし、それぞれ確かに同じ疑問を持つてはいた。

合宿が終わって一週間、カムイはまだ帰つてこないのだ。団長の留守を預かっているライスさんに聞いても「団長には団長のお仕事がありますからねえ」と曖昧にはぐらかされ、彼の笑顔はそれ以上の追及を許さなかつた。

今までも団長が留守にすることはあつたが、一週間は長い。それに、たまにやつてくる伝令の早馬も不安を搔き立てた。

「皆さん、こんなところにいたんですか？」

庭でのお茶会にふいの乱入者。

それはライスさんだつた。

「今から来週入つた特殊任務の説明を行いますから。食堂に来て下さいね。」

にっこりと4人の移動を促すと、他の団員を探しに行つてしまつた。

「よつしゃー！ 仕事だー！」

「どーせ馬鹿貴族の護衛とかでしょ？」

「・・・。」

「どつこじょつと。」

ライスさんが切れる怖いらしいといつ話は4人もよく聞いていた。彼より先に食堂に入つておこなつて名々らしい言葉を発して重い腰をあげた。

＊＊＊＊

「みなさん揃つたよつですの、説明を始めましょつか。」

ライスさんはパンパンっと手を叩くと、みなに清聴を促す。

「来週末、王立魔術学院の入学式が行われます。各地から要人が集まりますので、皆さんに護衛を頼みたいという依頼がきました。まあ、毎年恒例のことですし、わからないことがある人はチームリーダーに聞くといいでしょつか。」

華麗な丸投げとでも言おつか。

後でチームごとのシフト表を配りますと言つたライスさんは既に壇上から降り、あっけにとられているリンクの目の前にきた。

「お義父さまからリンク君に是非会いたいと伝言を承りましたよ」

と、悪戯っぽい笑みを添えて耳打ちするライスさん。

「サツ・・・お義父さんが?・!王都に来るなんて一言も言つてなかつたのに」

大小問わず王都への招待は「こと」とく断つて隠居を決め込んでいたサライが快諾したというのも驚きだが、リンクが護衛する場に来るなんて・・・

義父の「えへへ来ちゃいました」なんて言つ様子が頭に自然と浮かぶ。

サライに手紙を書かなければリンクは自室に直行したのであった。

＊＊＊＊

その日の夜、サライからすぐに来た返事を読みながら、リンクは自室でうなだれていた。

「リンちゃんへ

最近めつきり手紙をくれなくなつていたから心配していましたよ。来週末の入学式の件ですが、私からライスさんの方に話をつけてますので、護衛の任から離れるようにしてください。

王立魔術学院の関係者レベルの力があると、リンちゃんの変装がバレてしまう危険性があります。

忘れてはいなと思いますが、一定レベル以上の魔力保有者の田にはリンちゃんは元の姿つまり女の子に映つてしましますので。護衛の任の間は特別休暇をとつて私の宿舎に来て欲しいな。

久々の親子水入らずを楽しみましょう。

サライぱぱより

王立魔術学院での護衛任務は特殊業務扱いなので、ボーナスが出るはずだったのだ。

ボーナスが出たら特別休暇でもとつて小旅行にでも行こうかとシュラフ達と話していたところに、この手紙。

ボーナスも特別休暇も一気に消えてしまった。

(そういうえば、僕……いや、私って女の子だったんだ)

当たり前の事実をすっかり忘れていたことに気付く。ふつと顔を上げると鏡に映つた自分自身と目が合つ。短く切つた髪、ぺったんこの胸（もともとそんなになかったけど…）、昔よりちょっとだけ広い肩幅…

見慣れた自分の姿をまじまじと観察する。

いつの間にかすっかり慣れ親しんでしまつた男の子の自分。

今スカートなんて履いたらちょっと気持ち悪いなと苦笑いしてしまう。

ふつと昔お気に入りだつた白のワンピースを着た自分を思い出す。想像はふくらみ、場所はお気に入りだつたあの動物園で、隣にはカムイ団長・・・。

（・・・！何考えてるの私は？！）

勝手に膨らんだ想像に一人赤面してしまう。

（恋、してるのかなあ・・・私。）

もつと違う出会い方をしていたら、どうなつていただろう。今頃、デートとかしてたのかな？
いつもは警備で歩き回るアルフィンの道々を一人で歩く姿を想像する。

美形の団長の恋人なんて注目の的だらつなどにやついてしまう。

（けど、無理だよねえ）

これまでに、人気の高いカムイ団長の噂は嫌でも耳に入ってきた。

「貴公子のクレイとやんちゃのカムイ」

第一騎士団長のカムイと第一騎士団長のクレイは一人揃つて美形で、二人は競うように令嬢のハートを射止めてきた、と。

ここ最近カムイ団長は色めいた噂が消え、どうやら秘密の恋人ができたらしい、とも。

百戦錬磨のカムイ団長が夢中になる女性。

きっとどこぞの深窓の令嬢だともっぱら町の噂だった。

本当は女だといつても今は男の姿をして彼の部下となつていての自分が敵うわけもない。

それに・・・とリンクはため息をついて一人ごちる。

（元カレからもお前は女らしくないつて振られたんだっけ）

もし女の姿で出会っていたとしても、噂の女性に勝てるわけがなかつただろう。

可愛いもの好きの彼のことだ。好きな女性のタイプも可愛くて細やかな女性らしい人に違いない。

合宿の最終日に一人で見た夕日。

もしかしたらと期待した自分がちょっとだけ情けなくなる。

（じばらぐ恋はお休み！仕事頑張るぞー）

ぱんっと頬を白らはたいて気合を入れる。

叶わない恋を追うくらいなら、仕事に精を出そう。

悲しい恋なんてごめんこうむるんだ。

本気で惚れる前に気付けてよかつたなんて独り言をこぼすリンク。

カムイの秘密の恋人が自分だということを彼女が知るのはそう先のことではない・・・。

3・1 「変わったへや口算」（後編） (後編)

評価感想お待ちしております！

3・2 「迫り来る影」（前書き）

今回はちょっと短めです。
よければ感想・評価お願いします！

3・2 「迫り来る影」

第三章第一話「迫り来る影」

クレイとカムイは延々と走っていた。

背後から次々と迫る追つ手からの攻撃を回避しつつ、だ。

「ちにッ・・・じこつじじこまで付いてきやがる。」

「クレイ！炎を遣つかうがれ！」

「ちょーおま！それは！」

クレイの焦った声を聞き流し、カムイは詠唱を始め腕の辺りをまわぐる。

「心配するな。やいりて隠れとけよ。」

クレイが木陰に入ったことを横目で確認し、腕輪を外すカムイ。すると、みるとみるうちにカムイの周辺の空間が歪曲し、彼自身も苦悶の表情を浮かべ始めた。

「・・・ッ一ぐあああ

めりめりという嫌な音と共に、カムイの背中からなにかが生える。同時に彼の姿自体も変形し、あつといひ間に白い羽根を生やした黒い巨狼が現れた。

「・・・おーおー。やべえじゃねえか・・・。」

彼の幼馴染であるクレイはこれまでにも何度か彼の変身後の姿を見

てきた。

しかし、これまで以上に”完成体”に近づいた目の前の姿に驚愕の色を隠せない。

（もうタイムリミットが近いことかよ・・・）

クレイの驚きをよそに、目の前の異形は火炎を吐き、追っ手達を次々と焼き払っていく。

惨状を目の当たりにし逃げ惑う追っ手すら彼は悠々と羽ばたき、火の玉にしていった。

ものの数分で片はつき、燃え盛る木々の中心で異形は朗々と雄たけびを上げる。

再び空間が歪み、異形の体から黒い煙が立ち上った。

「大丈夫か？！」

「・・・なんとかな」

声をかけると、立ち上る黒煙の中からカムイが出てきた。こめかみを押さえ、苦しげな表情を浮かべている。

「クレイ・・・」

何か気になることがあったのだろう、厳しい表情を浮かべてカムイが話を切り出そうとする。

「・・・カムイ。とりあえず新しい服着る。話は後だ。俺は男の裸にや興味ないんだ。」

「すまんな。」

と、真面目くさった顔のカムイのお腹が突然ぐうぐうとすさまじい音

を立て、それを見たクレイは爆笑。

とりあえず火を起こして飯でも食うかと一人は歩き出した。

＊＊＊＊

「やつとアルフィンか・・・」

ギアルとアルフィンの間には2つの森林が横たわる。アルフィン側に位置するのが夕紅の森。サライが住む森である。一方、ギアル側に位置するのが惑雪の森と呼ばれる森だ。クレイとカムイは現在、ちょうど夕紅の森の北端にいる。追つ手達は惑雪の森から延々と彼等を追い続け、夕紅の森の入り口まで着いてきたのだ。

合宿後の団長会議では、ギアルの不穏な動きが議題となつた。カムイとクレイには”四天子の復活”という噂の真偽を確かめろ”といつ命令が下され、ラインシユタット城からそのままギアルへと隠密の旅に出た。

パチパチと心地よい音を立て燃える焚き火を見つめるカムイ。ほんやりとしたその瞳には、いつもの活気は見られない。

「カムイ。その・・・なんだ・・・」

意を決したようにクレイが口火を切るが、言葉が見つからないようでどもつてしまつ。

「・・・俺、そんなに獸化進んでたか？」

質問というより、自嘲するかのような口調でカムイが引き継ぐ。

「・・・かなり、な。」

「自分でもわかつてゐんだ。最近、妙に体が軽いし夜目も利く様になつた。」

浮かない表情のクレイを慰めるかのように急に明るい口調になつたカムイだが、幼馴染の目は誤魔化せない。

困つたもんだよと軽い口調でおどけてみせるカムイは、クレイの目からすれば心配の的以外の何者でもなかつた。

「あの子はまだ見つからないのか？」

「見つからない。でも、あの子が俺の”鍵”だとはまだわからないしな。ところで、お前の最近のお気に入りは城下町の踊り子つてマジかよ？」

カムイはこの話を続けたくないらしい。

「そんなこと今はどうでもいいだろ！俺はお前が心配なんだ！」

思わずクレイの口調も荒くなつてしまつ。

「今は俺自身やあの子のことより、ギアルの問題が最優先だ。心配するなよ。今日明日に何か起らるつてわけじゃないんだから、な？」

そんなクレイをやんわり諫めるかのようにウインクまでつけるカムイ。

とこりん強情な友人にクレイも折れるしかないと悟つたようだ。

「つたぐ・・・とつあえず今日は寝るか。明日の夜までに報告を済ませなきやだしな」

「おーけい相棒。俺が先に見張りに着くから、お前は寝てくれ。」「あいよ。じゃあ3時間経つたら起こしてくれな。」

絶対に眠れないだろうなと思いつつも、幼馴染の隠された強情さはよくよくわかつていいつもりだ。

とりあえず言葉に従い、クレイは目を閉じる。

目を閉じる直前に瞳に映ったのは、幼馴染のうつろげな表情。ギアルの動きも気になるが、クレイにとって一番の懸念はやはりカムイ。

王都に戻つたら例のあの子の事を本格的に調べようとした決意をしつつ、狸寝入りを決め込むクレイなのだつた。

第三章第三話「乙女心と男心」

「サラライ！久しづびり！」

「リン！会いたかったですよ～！」

ぎゅうつと効果音がつきそうな抱擁。

ここはアルフィンの城下町の宿場、サラライがこれから3日間滞在する予定の部屋である。

サラライほどの要人となれば普通もっと高級な宿場を利用するものが、彼自身の希望とあって部屋は質素なものだつた。

リンが気兼ねなく遊びにこれるように」という配慮もあるが、彼自身が華美なものを嫌う性質であるためだ。

しかし、部屋は綺麗に掃除され窓際にはサラライが好む百合のような花が活けてある。

宿場の女将なりの歓迎の意ととれよつ。

「今日は一日お互ににお休みですし、お茶を飲んだら外に行きませんか？」

「もちろん！ サラライよりも街には詳しくなつた自信あるんだから～」「じゃあ案内をお願いしますね」

きやつさやと騒ぐリンを見てサラライの頬が緩んでいく。
わざわざ隠居を出てきた甲斐があるものだとお茶を注ぎながら考え
る。

「さて、その前にちよつと失礼。」

サライはふふっと笑つて小声で詠唱を始める。
きょとんとしたリンは何事かと不安げだ。

「ほり。終わりましたよ」

何が起ったのかわからないリンは更に訝しげな表情である。どうしたこと?といった顔できょろきょろする彼女に、ついでにと体を指差してみる。

「...？」

つられるように自分の体を見たリンの絶叫。
この絶叫も久々に聞くなあと微笑んでいると、詰め寄ってきたリン
に肩を掴まれガクガク揺さぶられる。

「女の子に戻ってるじゃん！ダメじゃん！街なんか歩けないよ！」

ほんの悪戯心からの行為だったのだが、リンにとつてはかなりの打撃だったようである。

顔面蒼白でなんだかんだと喰いている。

「大丈夫ですよ。女の子の服を着ていれば”リンク”とはわからないですし。もし知り合いと会つてバレてしまつたら双子の妹つてことにしちゃいましょう？」

しかし、これくらいで引けるわけがない。
せつかクリシニ姫のためこの王都までやつ

男の子バージョンも悪くはないが、せっかくながらリンクではなくリンクの姿で一緒に過ごしたいものである。

「・・・うん・・・。でも・・・」

「リン！お願いします！」

「あ～～・・・もう仕方がないなあ」

「ありがとうございます。そうとなつたら・・・」

この時のためにと買つておいた女物の服を取り出す。薄い素材の白いワンピース、柔らかい革素材の茶のブーツは房飾りが付いている。

直接出せばセクハラだろうと踏んで包み紙に入つて下着も、こつそり自分好みの白のセツトにしておいた。（レースたっぷり！）小物として上品なラメ入りのピンクのショールもつけてみたり。買い物があまり好きではないサライだが、これらの品を買つときだけはうきうきしてしまつた。

「可愛い！ありがとう！なんかオシャレするのつて久々だから嬉しいかも」

気に入つてもらえるかとちよつと不安でドキドキしながら見守つていたサライだが、リンの本当に嬉しそうな表情にほつと安堵する。

「では、しばらく外で待つてますので、着替えてみてくださいね」「は～い。すぐ終わるから待つてね！」

早速着替えていたリンが衝立の向こうからひらひらと手を振る。これも半年近く男の子として生活したがゆえの習性なのだろう。警戒心もへつたくれもないリンの行動に少し顔を曇らせるサライ。しかし、彼女の突き抜けた明るさに警戒といつのはあまり似合わない。

惚れた弱みというのにはこういうものなのかもしないと苦笑いしながら、サライは部屋を出た。

* * * * *

宿を出て30分後、城下町の中心を抜け10分ほど歩いたところに湖に一人はいた。

気を利かせた宿の女将が準備してくれた特製のお弁当を持参しての軽いピクニックである。

お互の近況や一人で暮らしていた頃の懐かしい思い出話に華が咲く。

夕紅の森とは生茂る木々や囀る鳥の種類は違つたが、一人の縁は変わらず続いていると確信できる穏やかな時間だった。

「ねえ。サライは恋をしたことある?」

「・・・これはまた唐突に面白い質問をしますねえ。」

くすくすと笑うサライに顔を赤らめるコン。

「真面目な質問なんだから、せべりかたないでけしからんと答えてよー！」

「

（ああ、この子はこんなにも簡単に私を喜ばせては不安にさせへて・。
むううと顔を尖らして抗議するコンを可愛ごと想いつつも、質問の背後にあるであらうリンの恋心に思いを募らせるサライ。

子どもの悪戯にも似て、悪意なきその行為は、純粹であるからこのや
私を傷つける。）

「やうですね。もう長く生きてこますので、恋のひとつやふたつあ
りましたよ。懐かしいものですね・・・。」

「もうだよね。サラリって顔良し！性格良し！頭脳よし……つていうより、ダメなところが思いつかないもん。女の子がほつとくわけ無いよね。」

にせにや笑いでサラライの顔を覗き込むリン。

「今日のリンは口がつまこですねえ。そんなに褒めたつて何も出でこないですよ。」

我ながらもつとつまく返答できな「ものかと情けなるものだが、リンが相手となるとサラライは無力である。」「でも、とにかく伝えられたらいいの」と思つ反面、今の関係を失うことリスクだけは絶対に冒せないとも思つてしまひ。

「そんなつもりじゃないもーん。でも、ほんとに困つよ。サラライみたいな人に愛されたらめりめりと幸せだらうなつて。」

からかつてゐるんじゃないもんと呴きこつゝつと笑うリンの様子が恨めしいくらいだ。

照れ隠しなのかそろそろ行こうかと立ち上がり、小声で歌を口ずさむ彼女の声。

それは一種の警告音のよつとサラライの心中を揺さぶる。わざ波のように揺れ惑つ心を必死に静めよつとしたが、今の彼は無力。そして一瞬の間を置いて彼の口から出た言葉は、彼自身にも予想がつかないものだつた。

「愛しますよ、リン。あなたのことを心から。」

まるで心と体が分離したかのような感覚だつた。

そんなこと言つてはいけないと叫ぶ心とは裏腹に、体は、唇は動いていた。

「え？」

振り向いたリン。

それを見つめるサライ。

鳥のさえずりが遠くなつてゆく。

この時だけは風音すら声を潜めたかのようだった。

「・・・あなたは大事な、娘、ですから」

搾り出すように一句一句をつなぐ。

唇はそれを拒否するように乾き、うまく喋れなかつた。

しかし、それ以上に離れていくリンを見るのは怖かつた。

「ありがと。私もサライを愛してるよ。」

その笑顔があまりにも晴れやかで美しく、サライの心には鋭い棘のようになに感じられた。

自分でも悲しい位にわかつていた。

まだリンにとつて自分は「養父」であり「師」であり「友」に過ぎないのだと。

その称号はとても誇らしくもあつたが、「男」としてはスタートラインにも立てない自分が歯がゆかつた。

しかし、信頼する自分がその立場に不満を抱いていると知つたらりんはどう思つだらう?

彼女は泣くんじやないだろうか。

リンの泣き顔なんて見たくなかった。

そつ、彼女の笑顔を始めて見た時、自分がどう決心したか今もしつかりと覚えている。

何を賭けてでも彼女の笑顔を守りうつ。

それがたとえ自分の想いであつても、彼女の笑顔を守りうつ。未来のことなど誰にもわからぬにけれど、いつかこの想いを伝えることができたらと思う。

しかし、それは今ではない。

彼女の笑顔を失う可能性がある今は、この想いは胸に仕舞つてしまりと鍵を閉めなければ。

「では、参りましょうか？お嬢さん。」

「ええ、しつかりエスコートしてくださいね？お父様。」

差し出した手の上を握り返す暖かく小さなその手。

今はそれを信じ愛し守りうつ。

サライの新たな決意に祝福を送るよつて小鳥達は轟りを木々は風音を奏でていた。

3・4 「世の中は狭いものであります」（前書き）

久々の更新です。

亀更新で本当に申し訳ないです・・・。

他サイトの更新にかまけてこっちサボつてました。

反省。orz

なんとか完結に向けて頑張りますので今後もよろしくお願いします
!

3・4「世の中は狭いものあります」

第3章4話「世の中は狭いものあります」

「気にしなくていいよ、サラライー」

「本当にすいません・・・。とにかく、私自身が残念でならないです。」

「まだ時間も早いから、用事が終わったらお茶でもしようっつーね？」

湖畔での食事を終え、今から街の散策でもしようといふと、一人が歩き出していた矢先のこと、一羽の美しい小鳥がサラライの肩に止まつた。小鳥が小さく囁きながら指し示したその脚には小さなメモがくくりつけられていた。

こんな時に誰でしようかと、訝しがりながらもメモを開くと

”サラライ殿。至急、王立魔術学院までいらしゃるよ。リロイ”

額に手を当ててがつくりとうなだれるサラライ。

どうしたの？と首をかしげてこちらを伺い見るリンとメモを交互に見て思わずため息。

「申し訳ないのですが、王立魔術学院の現院長から呼び出しをくらつてしましました。大した用事ではないと思いますが・・・」

結局、そのままサラライは王立魔術学院に行つて用事を済ませ、それからリンと街で合流しようという方針で固まつた。

別れ際のサラライの落ち込みようといつたらなかなかのものでトボトボと去る姿にリンは犬か何かを捨てたよつた罪悪感に駆られたほどだった。

しかし、久々の女の子姿！

最初は不安だつたものの、すれ違う街の人々は誰も気付かなかつた。

・・・そう！これはまさに格好の買い物日和！――！

日頃、リンクの姿では入りづらい女性服のお店や宝飾店にだつて入り放題！試着し放題！

サラには申し訳なかつたが、買い物は一人派のリンにとつて、サラの呼び出しあはちょっとしたチャンスだつた。

学院への道を曲がるサラを見送つて意氣揚々と街へ繰り出す。

思えば女の子の服を着て出歩くのは3ヶ月ぶり。

更に言えば、街を歩くのは初めてのことだつた。

不思議なことに、見慣れた街の風景がいつもと違つて見える。

騎士団員のリンクの目と女の子のリンの目、それは同じであつて違うものなんだなあとふいに感じる。

女の子のリンは一時的にいないんだ。

そう思うとなんだか寂しかつた。

リンクを知つている人たち・・・

顔見知りの街の人、騎士団の仲間達は女の子のリンを知らない。

そして、カムイ団長も女の子のリンを知らない。

彼が知り、彼が可愛がつているのは男の子のリンク。

そこまで考えて、あつと息を呑む。

考え方いけない。気付いやいけない。

気付いてしまいそうな感情に蓋を閉める。

（知らない世界で叶わない恋をするなんて絶対に嫌だもん・・・）

小さく決意してまた歩き出すリンだった。

＊＊＊＊

「ふう。よく動き回つた～・・・」

満足気に呴いて暖かいティー・カップを握りなおす。
向かいの椅子には袋や箱が鎮座している。

買い物を一通り終えたリンは、とある喫茶店にいた。
運よくテラス席に通してもらい、ぽかぽかと心地よい日光の下、最高に美味しいお茶とケーキで至福の一時・・・

（ここ）のケーキ美味しいって噂、ホントだつたんだあ～。いつもならゼクス達と一緒に昼でもバーにいるしね。あ～幸せ～

料理上手のカイがたまに甘味も作ってくれるが、やはりプロの技は一味違う。

久々に食べるケーキのスポンジの感触に酔いしれる。

（ふわふわあああ～～～）

混み合う店内を見渡せば女性客ばかり。
リンクの姿で訪れていたりきっと浮いていたりう。

女の子って幸せ、と一人でにやつべ。

「お客様・・・大変申し訳ないのですが、店内が混み合っていますので相席をお願いできますか？」

ふいに女性店員から声をかけられる。

自分の卓を見れば、椅子があとひとつ残っていた。

「あ、もちろん。大丈夫ですよ。」

男ばかりの騎士団員の耳にも入つてくる人気店である。
そりやあ相席だつて仕方あるまい。

若い女の子だつたら久々にガールズトークなんて出来ちゃうかも?
!とわくわくしてしまう。

が、しかし・・・

「申し訳ないです、レディー。お隣に失礼しますよ」

ふいに上から掛けられた声は男性のもの。
しかも、聞き覚えがあるこの声は・・・

「だつ・・・・・あつ・・・・・ど、ど!」

うふふと俯き加減でごまかしを試みる。

相手さんはそれを男性に慣れていない年若いレディーの照れ隠しと
受け取つたのか・・・?

「そんなに緊張なさらないでください?怪しい者ではありません。
騎士団に勤務しているカムイ=リオリスター=ブラッドフォードと申
します。以後、お見知りおきを」

柔らかい物腰でそつと跪き、いかにも上流階級らしく述べる彼。

(だ、だんちょ――――――マズイ!――――つてかなんで
一人でケーキ屋?――)

完全に頭の中が沸騰状態のリンの脳内など知る由もないカムイ。

ふつと笑った気配がしたかと思えば、ここれまた流れるような動きでリンの手をとり、その甲に軽く口付ける。

その瞬間、完全に硬直したリン。沸騰どころか思考は完全停止。そんなリンを見たカムイはちょっとやりすぎたと思ったのか？

「レディーのお気に障るようでしたら私はここで退散しますが・・・

「あつ・・・・！あのつ私は気にしてないのでつ」

（・・・・・！私、何言つてんの！・・・）

条件反射というのは恐ろしいものだ。

元来、お人好しなリンの選択肢にここで黙つて見送るなんて賢いものは無かつた。

「ありがとう。あなたが心の広い女性で助かりました。」

それを聞いて安心したのか、満面の笑みで椅子に座るカムイ。彼を追い払うチャンスを自ら逃したことによる垂れるリン。

（ああ、神様・・・世間は狭いものですね・・・）

リンの心中も知らず、カムイは楽しげにメニューを覗いていたのだった。

「レジのケーキは本当に美味しいですね。私はよく通っているので

す
よ
」

「え・・・ええ。」

「あ、男、しかも騎士団員がケーキ屋に通つなんておかしいですよ。成ぶがう心うへん話うす。」

「うえつ、そんなことは……」

「トーマーはこの問題を解決する方法を知っていますか?」

カムイが席についてから約10分。

バレないうちに早々に退出しようと買つたばかりの帽子を目深にソワソワするリンを引き止めるかのようにカムイは饒舌だつた。3種類程のケーキを頼んでパクつきながらも上品に話し続ける。普通の女性であれば、イチコロニコロ、といったところか？

「…………いえっ、私は今日が初めてで…………」

「 そりなんですか！」「 けつ けつ 有有名なお店なんですが・・・ も
しや他にお気に入りのお店があつたりするんですか？是非、教えて
いただきたいものです。」

「あつ、じ、実は都に来るのが今日初めてで・・・」

その時、悪戯のように一陣の風が吹き去つた。リンの帽子がふわふわと風に乗る。

「「あつ」」

(コンク?ー・・・ニヤーあの時の?ー?ー?)

（ひま）

実際は3秒程度の時間だったのだろうが、一人にはまるで永遠にも思える長さだった。

リンにとつては最悪の事態。

そんな思惑のズレた二人の行動は双方とても分り易いもので・・・

椅子を飛ばしそうな勢いで逃げ出すリン。
それを追つて腕を掴もうとするカムイ。

(なんで逃げるんだ? ! ?)
(絶対バレてる―――――― ! !)

この期に及んでもズレまくる二人。これも一種の男女のすれ違いと
やらなのだろうか?

しかし、運命の女神はカムイ側に微笑んだよつで・・・

「レディー。ちょっと待つてください!」

何事かと駆けつけた店員に行く手を遮られたリンをカムイが捕獲。
右手でリンを捕まえたまま手早く会計を済ませリンの方に向かい合
う。

「ちょっとお話ししましょう。」

有無を言わせぬその真摯な眼差しに、とりあえず頷くしかないリン
なのだった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0314d/>

Travel For You

2010年10月10日19時39分発行